る家ども海に差し入りたるに作りかけ、ほのかにみゆる一村里の苔館、見る目対乾すまで心ありがはなり。

芦の屋近からず、鹽屋のけぶりの立登る景色、薄墨に書きたるやうに思はる、西の方は海遙々と見え渡り、並び立てる松の木の廻り帆かけたる舟ども冲に行き波にうつろふ漁火の影、日はすでに海中に入り果つるかとあやしまれながら、高き山に下り立ちたり。

此處は何處と問へば、伯耆の國の大山なりとかや、谷を越えて大なる棲門あり、歩み近づけば、すざまじき法師の出でゝこなたへと申す。僧は次郎と共に門の内に入りけるに、主の僧も出でらる、年の程は五十計りと見えしが、その様いづれも藺たけ、德高く見えたり。



其の中に主の僧の申されけるやう、それ生死の一大事は、たかきも卑しきも逃れがたきの道なり、行ひすましくありと見ゆるも、一念の妄執おこす時は、やがて我等の方に引き入らるゝ便となる、されば昔も今も、德行の高き輩多くは魔道の眷族なれり。

我等そのかみの迷ひも皆また斯くの如し、今の世に學道すぐれ、德行高しといふもの、更に眞の大道に叶ひ難し。知らざるを知れりと思ひ、得ざるを得たりと思ひ、我れは人には劣るまじと、勝れたるを惡しみ、勝れるを嫉み、我慢増長山よりも高く海よりも深かし、我等強ちに、便を求めて引き入るゝには及ばず、彼より魔道の網にかゝる人のみ之れ多し。また更に他の障碍にも依らず、みづから大道を妨ぐる類ぞかし。

修禪寺の惠山長老は、唯識法相の宗義を明らめ、花嚴涅槃の理に達して、常に講談をつとめ數百人の弟子を領せられけれど、その心ざしわが宗派をたゝへて、他の宗義をおとしめ、心に彼我を懷き、上覺寺の行蓮上人は、說法に名をほどこし、諸方の男女を歡化し、一切經を書きたて、佛像を多く作りて、供養を營み、世には佛のやうに尊びしかど、一生の間只經論を集め佛像を作り、他の財物を求め、既に求め得ては貪る心の起りて、功德は有るに似て却て貪欲の煩惱となれり。

靈光寺の明德法師は、そのかみ、武門の高家なりけるを忽ち武職をすて佛道に入りけれども、その俗家にありし時は、理をまげ法を破り、百姓の財產を奪ひ、人を痛めて取りあつめたる金銀をもて、



寺に入りて堂舍を建てらる。

是等の輩みな、我等の障碍に依らず、死して魔道に入りはべる、是れのみならず、又諸方の出家と云れじ者、幾千萬とも數知らず、行もなく知もなく、旦那に諂らい、詐を構へ、欲の深き事俗よりもまさり、腹の惡き事在家に過ぎて、世を渡る法師、死しては地獄に落ちて、不法の報いを償ふ。或は儒道を學ぶものは、靜思浩然の氣を養ふといふ事は、夢にも知らず、詩をつくり文を書くとては、心にもなき詐りを筆に見はし、五常の道を行はずして、人を誑かし、手を出して盜みせぬばかりに月日を送る、天理に背き神德に違ふて、死しても本德に歸る道なく、三惡道に落つるものなり。

在家は世渡り身を過ぐる間に、後世の道を願ふとはすれど、愛欲

に引かれて眞實の思ひなく、多くは地獄に落つとかや。今の我れ我れもかゝる志より魔道に入りて、堪へがたき苦しみをうけながら、漸愧懺悔の心を起さず、却て佛敵法敵となる淺しさよと言ふかとすれば、彼の僧共は言ふに及ばず、多數の法師原まで恐れわなゝぎ、立ち騒ぐ程に、皆共に宮殿の柱に繋がれて働き得ず。そらより猛火起り、宮殿樓閣一同に燃えあがり、をめき叫ぶ聲と共に山は崩れて、殘る人なし。

而し次郎計りは繋がれず、遠き谷に逃れたりと計りありて、先の僧の來りて、次郎を連れて山を出でつゝ歸り見れば、さしも作りならべし山中の宮殿樓閣も跡方なくなりぬ。

是れより次郎は僧に連れられて、又空を翔りて、西國の間を殘らず巡り、又京近かく歸るとて、播磨の灘に便船を請ひしを、船子共はしたなく答へて、乘せざりしかば、いで汝等に思ひ知らせんとて、沖の方に向かひて印を結ばれしかば、俄に黑雲覆ひ大風吹き起り、海の面は闇の如く、波高く揚り雲の山を築き砂の山を重ね、多數の舟ども、苦を打ち入れて、磯近く寄せんとするも叶ひがたし、舟の内には伊勢の方に向ひて拜むもあれば、觀音經を讀み、念佛を申すものもありたり。やう〳〵にして日の入かたになりて、風やみ、浪靜まりければ、多くの舟人共蘇りたる心地して、辛うじて命助かりけり。悅ぶ人も多かりし。

僧は又其れより程なく山崎まで來りて、夜の明け方に次郎に物食はせ、都に入りて西の岡より北山をめぐり、東山に出でければ、五

條河原に能ありとて、都の人貴賤上下足を空になして、芝居に入り集りぬる事雲霞の如し、桟敷には色々の幕うち並べ、誰とは知らず、歴々の人ども見物するを、僧は次郎をつれて見めでりけれども咎むる人もなし。

能はすでに初まり、名高き上手共入れ替り〳〵いたしけるに、諸人心を空にし萬事を忘れて見居たれば、僧すなはち、次郎に語らひて、此の奴原あまり物心も失せたる樣なれば、目を醒させんとて、舞臺の上に座して何やらん唱へられしに、忽ち三條西の洞院より燒き出て、黒煙まで揚り一面になりて燒け渡る、關荒く、焔は飛び散りけれど、町續きを越えて爰にかしこに燃えあがる、すはや火事よといふ樣にこそあれ、數千萬にもなき見物の諸人等は上を下へと返し、桟敷より轉び落ち、芝居樂屋の差別なく、我れ先きにと込み合ひ押し合ひて、踏み殺さるるよと女童の泣き聲、呼ふ聲、物あひ更に別らず、兎角して火も靜りければ、僧は次郎を連て、歩むともなく都を出で、さゝなみや志賀に出でたり。

山越し比良、小松、今津、海津と打過きて、越前の敦賀にと着いたりける。

到らぬ隈なく見殘す所なく、飢をも知らす寒からす、東國のかたあまねく見廻りて、富士の高根、淺間が嶽、清見が關、田子の浦、箱根より、駿河の國、鎌倉山の昔の跡より、聞きつたへし名所を巡りて、殘す方もなし。

春もたち夏も過ぎ秋の空、冬の時も心を苦しむる事もなし。

暫くも留らず夫がしたを打ちめぐり、山河海のおもて、空をかけゆくときには、折々は只おそろしくもありたれど、心の外の旅の間に、月日のたつをも覺えず、五年の光陰を過ぎて此の度は此處に歸り來るも、長き暇にあらずとさま〳〵に語りしが、廿日斗りも家に在りて、見なれぬ奇持を諸人に現はし見せて、又も行方なくなりぬ。

此の程の形見てや思ひけん、檜木笠、檜木の棒ちぎれ篠懸(修驗者の服の上に被ふ衣)などを殘し置きたり、父彦八わ年より齡傾きて程なく身まかりぬ。殘し置きたる篠懸は、瘧をふるひて病みふせ居ける時、彼の篠懸を枕下は置きぬれば、やがて瘧の落ちたより、方々に聞きつたへて、珍重せしが後、その行爲を失ひけり、檜木笠と檜木の棒は、古き家の習でとて、雨漏りて遂に朽ち果てしとぞ。



## ○古狸貸家を騷がす

戸田流の兵法の達人富永金左工門と云ふ浪人有り。江戸の芝久保坂に住しける。

此の借宅は何かは知らず、夜に入れば家人を惱ましける故に、富永の思ふには、渠れは人間にあらず、いかさま狐狸の所爲ならんと心得て、此は寛永十二年亥正月十五日の夜の事とか、常の寢所には己が伏したる如くに拵へ、その身は片隅に待ち居たり。

其夜も常の如く、五更に及ふ頃になれば、戸のあく音もなくて入り來るものを見れば、兩眼星の如く、何とも見分け難き形裝凄まじ

きものがあつた。

彼れの寢姿の上を飛び馳せつ狂ひ廻るを見て、得たりかしこしと切り付くれば、彼は竹の簀子の下へ逃げんとした。所を追ひかけて又も斬り付くれば、やう〳〵二の太刀にて仕留め、更に喉元へ深く脇差を突き立て、燈火を燈けてよく見れば、幾年も歴たる古狸なり。

富永は化物仕留めたりと高聲にて呼び立てければ、近所の人々驚きて馳集り、始終を尋ねて居合ひたる人々、流石、侍かなと口々に譽めけるに、家主が言ふやう、貴殿此の家に來らざる前に、此の狸の住とした故に、二ケ月と住する者なかりしが、此の上は化物の根絶して、心安しと悦びける。

扨て富永は興に乘してや、翌日の朝入口に狸をふら下げ諸人に見



せける程に、往來の人諸群集して評するに、此の騒しき市中にいかで狸の住む可きや、買求めて、人を惑はす謀なる可しと、口々に惡口しける故、辰の刻には内に取入れける。

此の事は、半は虚のやうに世間に取沙汰されて、近付の知音にも逢ひ難くや思ひけん、住所を變つて彼所此處と迷ひ歩るきけるが、後には行方知れずに成りにけり。

その比能く此の人を知りたる人の批評には、富永は、常に兵法高慢しける故に魔のさしたるものならんとなり。



## ○白髪の大童子

京の五條坊門高倉の亭に住む大納言泰通の邸第は、父侍從大納言の家にてふるき所なり、相續きて住まはれしかば、狐多く住みたりけり。

然れども少しも怪異の事なければ、扨ても打ち捨て、過きけるに、年を經るに從つてだん〳〵妖怪現はれ來れば、大納言も遂に怒り給ふて、狐狩して種をたゝと思ひて、侍共に皆その用意を申し付けられぬ。

翌日下人共數多具して、獨も洩れず參る樣、面々つるぎ又は弓矢の用意すべき樣仰せられつゝ、四方をよく固めて、築地の上屋の上にも人を立て、又天井のうへにも人を入れて悉く狩出して、出でん所を打ち殺ろし又は射殺すべき樣下知ありたり。



然るに其の前夜の曉がたに、大納言の夢に見給ふやう、年たけし白髮の大童子の、とくさの狩衣きたるもの、西向の坪の柑子（今のかうじ蜜柑）のもとに畏りて居たり。

大納言、あれは、何者ぞと問ひげれば、恐れ〳〵申しけるは、「是れは年頃此の殿の御内に候ものにて、吾れ二代迄で相續き候ほどに子孫も數多いできて候へ、おのづから狼藉ふるまひ候事などそれがし心の及び候ほどは制し仕り候へ共、用ひ候はぬにより、今御勘氣を蒙り候事は尤もに候、其いはれあり事に候、明日皆命を取られ參らす可き由承り候、今宵斗の命はなしくて候て、恐れ〳〵優ひ申上候はんと參り候也と。柱げて此の度の御勘氣をば許し給はり候へ、今より後痴れ事仕候はじ、その時いかなる御勘氣も受け候べきなり。

若く候奴原は、此の氣色の樣申し含め候はゞ、いかでか懲り侍らず候べき、あやまりて御館を守らせられ候はゞ、今より後は御内の吉事などをば、必らず告げ知らしめまいらすべく候といひて畏り居たり。

と見る程に夢さめぬ。夜もあけて日の出にも成りにければ、大納言起き給ひて、端の遣り戸をあけて見たれば、夢に大童子が居ると見たる木の元に、老狐の毛の長きが一疋ありて、大納言の御顔見奉りて、恐れ入りだる體にて、やをら簀の子下に這ひ入りにけり。

大納言も不思議に思召されて、其の日の狐狩は御沙汰止みとなりたり。

其の後は化物長く無しゝり家事に吉事あらん時は、必ず狐の鳴いて告げなれば、かねて思ひしられけるなり。

## ○岩田刀自の仙術

安房國里見義廣は、武勇を以て國家を治めその威漸く盛ならんとす。その頃朝夷郡より老嫗一人召連れて城中に來るあり。其の年を尋ねるに、數百年に及ぶといふて年の數をば覺えず、髪は白きを變じて黄金色となり、眼は碧く耳は長し、顔だけ見れば未だ五十年ばかりの女にて、髪は垂たて、座すれば地にたまり、名を問へば岩田刀自と答ふ。後鳥羽院の御時信州奈須野の狩に三浦大助に具せられて狩場に赴き、九尾の狐を殺しゝ事や、砒霜の殺生石をしだきて人おほ

く毒に中り大熱を發して狂死したる事など今見るが如くに語れり。その時十八狩場のあとに父母兄弟皆死せしかば、これを物憂き事に想ひ、山に籠りて道を修せる中に、何方ともなく仙人と覺しき人來りて藥を授けたり。

依て一粒の青丸を服せしに、身も輕く心も爽かになりし所に、彼の仙人我を召連れて空を馳せ、太山の峯に行きたり。その所は何地とも知らず、七寶の床に座せしめ、丹栗のあかき栗に霞醬を與へたり。我れ之に醉ふて死せしかば、彼の仙人玄天の甘露半合ばかりを飲ませしに、醉さめて心爽かになりぬ、その時仙人語りける樣、汝鶴龜を見よや、氣を伏して息を靜にす、此故に氣消散せず、命至りて長し。又病める事なし。今より九十年の後には兩眼の色碧となり



て光あり、よく闇の中にも物を見る可し。千年にして骨をかへ、二千年にして皮を脫し毛を易ふべし。これより再び形おとろへず、齡傾かず、命更に限有る可らず。凡世の人、內には七情の氣鬱結し、外には風雨寒暑に心を奪はれ、色を恣にし食に溺れ、心火たかぶり內に五臟六腑を壞し、九百の穴をたゝらかし、外には四十九重の皮、八萬の毛の孔空しくひすろぎ、十四の經十五の絡みなもぢれゆるまる、三卽六十の骨つがひ悉くはなれ、諸病之れより生じ、壽命此の故に縮まり、終に百年を保つ人世に稀なり。その外諸の憂萬の悲しみ、交る〳〵心にまどひしばる事、一夏の虫のともし火に入るが如く、名のため利のために物思ひ絕える事なし、流の魚の毒餌をはむに似たり。徒に魂つかれ、精しづをれ、僅かに方寸の胸の間に忘念の浪

高く揚り、互にねたみ傷ふ事猛き獣より烈し。此の故に佛經には世界をもつて熱宅と名づけ、道教には、此の身を以て大なる憂の元となす。故に人の世の中を見れば、沸湯の如く凄し、何ぞ身を捨て、その間に置くべきや。既に尺の形を練りて、一寸の心を磨く時は、天にのぼり地に入り、雲にのり水を走り、千變萬化更に無方にして飛行自在たる事萬乘の君なりとも及ばず。まして普通の人、誰れか之れに増さるべきとてその方を授けられしに、我れぞれより當國の山中に歸り、深く籠りて習ひ侍り、食は松の葉を取り、茯苓（蔓草の一種）を喰らひ、薬は又免絲子茅根（いぬえの根）を求め、石を練り、膏を取り、霜を煮て飴となし、百花の露を凝らしてこれを練り、しば〳〵これを服するに、長く五穀を斷ちて更に飢えず。心を



松風朗月嘯ぶき、瀧水に慰め欲もなく怒も無しといふ。義廣問ふて曰く、我も亦仙術を勤めば習ひ得べきや。答て曰く、心を靜めて吾物とし、色を遠ざけて、欲を離れ、味の甘を退けて、樂しくも悲しくも只だ是れ一つにして心を止めず、德を施し片落ちなくば、自然に天地の惠みに叶ひ、日月と等しく長壽を得べし。目には猥事を見ず、耳に猥事を聞かず、聲に猥事を出さず、身を猥事に使はず、行くも止るも立つも臥すもまた、猥を避け、常によく守る可しといふ。義廣聞きて、扨はこれ人間の交りは、此道の障りなり。障りを退けて務めんとすれば、鹿猿如くなるべし。然らば長生しても詮方なしとて、樣々食を進むれども刀自更に喰はず。只だ酒こそよく飲む。然れども醉たる色なし。その形おかしげに見苦しき事を、若き

女房達大に笑ひしかば刀自笑ひ、女房達悔み給ふなと指しけるに十七八二十四五計りの女房達十五六人、俄に變じて姥となり、膚は鷄の皮の如く、背は鮫の鱗の如し。髪白く色黑腰屈まりしかば、女房達大に驚き、歎き悲しみて涙は雨の如し。免し給へと手を合せ詫言す。刀自、さては懲り給へとて指さしければ、元の姿となりにけり。

義廣大に怒り刀自を殺さんと計られたるに。刀自はそれに先立て之れを知り君の志あり。國運久しくあるまじ。今より五百月の後に必ず横ざまに災あらんと、かき置きて座を立つかと見えしが、その行方を如らず。依て追つて國中の山々隈なく求むれとも更に知る由なし。義廣曰五百月は四十餘年なり。我れ何んぞ其れ迄での命あら



んやと。然るをよく見〳〵れは百の字はあらで箇の字なり。果して五ヶ月の後北條氏康のために國府臺にて敗戰しけりとぞ、其の國の人岩田刀自の生國も知らず、又誰か子にて後に居る所も知れずとなり。



## ○手短和尚

下野の國宇都宮の邊りに、東盧山盛高寺といふ精舍あり、第四世を祥貞和尚と云て、永平十一世の法裔、文明明應の頃此の寺に住職たり。永正八年僵化と言へり。

偖てかの祥貞和尚は手かく技に拙なからざりしが、ある時、天狗

の來りて云は和尚の手暫しがほど借り受け申したし、達ての所望なりと云ふ。和尚答へて曰く、手を貸さん事はいと易き望みなれど引きぬきて持つて行れん事などは諾ひがたしと言はれければ、天狗言ふ。さるにはあらず、たゞ貸すとのみさへ云れなば、それにて事足れりと言へば、去らば貸し參らす可しといふに、彼の天狗謝して歸りぬ。

夫れより和尚の手何日とはなく縮まりて伸びず。されば邊りの人和尚を手短の祥貞とあだなして呼びぬ。

三十日計り過きて天狗再び來て、先つ頃借り申したる手をお返し申す由を云ひ、火防の銅印一枚を贈りて歸りしとぞ。

その後和尚の手は元の如く伸びたりと云ふ。祥貞和尚の書も亦火



防になる由を言へり。この一條は己れ北海道の地に遊びし折り柄、聞取りたる話なり。且つ火防の銅印の押したるも貰ひて歸れり。



## ○蟇の蛻

文化甲子の夏六月一人の旅畫師あり。信洲鬼無里の松巖禪寺に滯留して、障子や壁に向つて數日畫筆を振つて居たが、其の寺の後園に大蝦蟆數千疋も樓んで居て、黄昏より洞口を這出して四方に散亂し食を漁り、がら〳〵と喧しく、夏の短夜の眠を妨ぐる事一方ならざりき。

畫師も連夜の蝦蟆に弱つて、住職に對して彼の蟇を他所に拾てん

ことを願へり。住職の申すには此の事に就いて、先年寺僧共が打ち寄つて、此の蝦蟆は禪定を妨ぐるものであると言つて、一夕洞口から這ひ出すのを捕へて、盡く俵に入れて門前の急流に捨てしに、如何にしてか翌朝皆歸り來て元の如く、力を勞して少しの得る處もなくありし、と言ふ。畫師は是れを聞いて既に蝦蟆の奇妙を知る。今一つ奇なるは密室に封すとも一夜の中に出ずと言へり。吾れ未だ是れを知らずと語ると、寺の若き僧、其の夕方に大墓一匹を捕へて、是れを銅の函中に入れ、板石を以て蓋とし、重ねて重しとして大石をのせ、畫師の枕元近く一の障子の外に置き以て夫の不思議を試めさんとしたり。

偖て、終夜他の墓のぐう〳〵と鳴き喚きけるに、彼の銅函中の墓は、只時々ぐう〳〵微聲を出すのみ。丑の刻の頃に至れば、寺僧起き出で堂上に讀經す、明七つに成らんと思はるゝ頃には、四方に分散せる墓庭に集り來て、其の鳴く聲一層喧かりしに、忽ちに其の聲の止みて肅然として物凄く、又銅函中にも聲なくなれり。其畫工は怪しみ乍ら未た臥して居たのに、早くも寺の僧達は二三人來て、昨夜の墓は如何にとに問ふ。畫工も起きて大石を脱けて、蓋を取つて見ると、中には何物もなかりき。凡て蝦墓は烏を恐ろしのみにて、犬猫などは却つて道を避けて行くとさへ傳ふ。實に墓は虫類中の不思議なものである。

## ○老狐深く禪理に通ず

小督の局既に害に遭ひし後、徹齋も所領を失ふ。依つて淡輪に困居す。或時雲水の僧あり、徹齋が家を訪ふ。狗子無佛性の法活に及び悃々と反復して之れを盡す。

徹齋も亦困を消ずる便を得たりと大に悅び、此れを止め宿せしむ。終夜一問一答、曉に及んで歸りしが、二三日を隔て又來り宿す。

其の宿院を問ふに、少林寺の耕雲庵なりと云ふ、耕雲庵は堺の津にあり、淡輪よりは相距ること十里餘りなり。故に徹齋も其の委細を知る由なく、少しも疑ふ所なく、深く交り、主客意を盡して禪理



を味ひ、少しも倦むことなし。

或る日の事、耕雲の僧困睡して机に靠る、徹齋も共に床に臥す。良ありて徹齋先づ醒めて客僧を見れば、衣帽は常の如しと雖も顏面既に白毛を生じ、裾より長尾を出し居たり。

大いに驚けども始終の樣子を見んと、復初めの如く床に臥し居たり、暫く有つて客僧目を醒し、徹齋が旁に寢たるを見て、心竊かに疑ひて、手を拱ぬきて考ふる樣なりしが、忽ち立ち上り、徹齋目懸けて、如意をあげて打たんとするとき、徹齋目を醒まし欠伸をなしたり。

客僧時惡しくと思ひけん直ちに出で去り、之れより客僧の來ることなし。

五六日後淡輪の里中に老狐死してあり、その傍に衣帽如意など取り散らしありたれば、疑ひもなく先の僧なりと知られたり。斯くて一二ケ月の後、少林寺の耕雲庵白藏主と云ふもの、徹齋を訪ひ來りて、覺心眼偈を說く、徹齋此の妙理を感じ、白藏主を敬禮すると同時に禪理の尊きを知り、其家をば蒙禪堂になし、白藏主を止めんとす。

白藏主其の請を諾はず、辭して去らんとす。徹齋强いて之れを止め、懇ろに開基たらんことを勸め且つ曩に耕雲庵の僧の怪を告ぐれば、藏主の云く、如夢幻泡同一甘味、我れも亦老狐なりと云ひて大に愁嘆す、徹齋頗る感心して、死狐を哀れむの念を起す。

時に白藏主云ふ、我れ久しく老狐と交り、今に至りては身心蒙昧



たりと。徹齋白藏主を疑ひ且つ怪しみて、持佛堂に請じて戸を閉づ白藏主云ふ、戸を闔づること勿れ、徹齋聞かぬ振りして、堅く是れを閉づれば、白藏主怒りて曰く、師を請じて何ぞ無禮なる、早く戸を開かずば、我れ持佛堂を燒く可し、と高聲に罵りたり。

徹齋益々怪しみ、臭藥を薰じて之れを燻ぶりたるに藏主堂內に在りて大偈す、徹齋卽ち堂內に入り、藏主を縛らんとす。藏主遁れ去らんとして、誤りて戸の下に倒る。卽ち之れを押へて繩を掛けんとす。藏主徹齋の胸を突かんとして立ち上る時、其の顏色を見れば、眼光射るが如く、兩頰の上に生ずる銀毛針の如し。徹齋力を極めて是れを押しすくめ、其の咽喉を壓して縛し終り、松葉を燒きて薰灼すること廿餘時に亙りければ、遂に大老狐となり、奮飛して逃ぐ。

徹齋歯切りて怒り且悔むと雖もせん方無し。

徹齋直ちに之れを追つて淡輪の田畔に至り、叢の中に老狐の隠れ居るを見て、偽つて狐に誑かされたる者の風をなして田頭に伏す、老狐望み見て疑ふが如く、徐々として其の傍に來る、徹齋いよ〳〵魅されたる風をなせば、老狐喜ぶ色ありて側に寄りて臥す。

その時徹齋むずと組みて動かさず、是れを縛して歸り室中に置き汝よく藏主に化し得たり、亦他に化ける事を得るやと言へば、卽ち一美婦人に化す、艶色まさに雨中の挑李に似たり、やがて又變じて一勇士になる、髪冠を衝き、皆悉く裂けて髭左右に分かれたり。

徹齊卽ち縛を解きて云ふ。汝此の妙術あり。我れ殺すに忍びず、逃去るの後と云へども猶時々來れと云ひて放ち遣りぬ、その後徹齊



存命中は時々來りて吉凶を告げ知らせしと云ふ。

## ○妖物に魅せらる

三村紀伊守は備中半國を保ちて成岩に在城す、富民の女容色艶麗なるを。物の便に紀州一度見て、其の姿目にあるが如くにて更に忘れず、文通遣はさん手傳もがな、かゝる心を知らればやと思ひ煩ふ處に、如何なる知るべにや、深夜人靜りて參り初めしより、暮を待ち明くるを恨みて、夜を過ごし紀州精神悃々たり。或る時欝氣したりとて、城外に出でられたる後、暮過ぐるに及んで遙に山上を見れば、鞠の大さなる光物飛び來りて、城中に入りて屋宇の間に隱る、

家老怪しみて近侍の士にこれを詰問す。近侍の士彼の密通の事を告ぐ、然るにかの女の來る所歸る所を知らずと云ふ。家老入りて諫めんとす。近侍の士、そは相談の爲め申したるに候ふ、臣まづ諫め申すべし。猶承引なくばそれに付て時宜の御計らひ候へと云へば、家老尤と同ず。近侍の士紀州の前に出で、昨暮山上の光物飛び來り御城に入り候を御覺せられ候や、此の比の御惱は蒙魅の祟にもあらん、色々不審しき事共御座候。古もさる例なきに非ず。御氣を付け候へかしと申せば、紀州心得たりと其夜鉗を以て竊に彼の女の髪を少許り斷ちて、懷中に入れ置き、明日取り出して見れば、髪銀針の如し、紀州大いに驚きて、近侍を呼びこれを示ず。近侍の士、此の事猶豫すべからず。小臣今夜閨の外に待ちて、執へて刺殺さんと言へ



ば、紀州不可なり、かの女臥床に就かざる前は、氣をゆるす可からず、萬一仕損せば、悔ゆるとも何ぞ及ばん、前夜髪解いて後自ら覺らす必ず疑ふ可し、我温語を以て其の情を柔げて後汝に知らせん。早まるなと制せらる。夜半過べる程に閨中俄に躁動す。近侍の者共起合せて、戸を排し入りて見れば、紀州氣絶せり。頃くありて、目を見開き、我れ氣絶せし事無念なり、去れど彼の女によも活きじ、今宵來るや、戸外に立ち今宵は心常ならじ、是れより歸らんと云へしより、なだめ伴入れ懇に語らひ、かの女の眠るを待ちて乘りかゝり、三刀まで刺したる處、我を脇に挾みて天井に飛び上り、やがて天井より落ちたりしが、夢のやうにて覺へずとぞ語られき。然るに天井の破れより血の流るべこと夥し。夜明けて光物の來し所のに

遣はして、血を便りに尋ねければ、三里餘り深山に入りて巖穴あり血此の穴の口に至つて止る。怖れて入る者なし。壯者あり、腰に繩を付けて這ひ入る事二三十町、暗くして、何とも知らず死體ある樣なれば、其の足に繩を付けて引出し見れば、老嫗の丈六尺餘り、白髮は一丈許りにて、面背を覆ひ、胸に創三つありて死せるなり。其後紀州の病も癒えたりと云ふ。

## ○櫻柳の間いつか大鬼處となる

出雲國能義郡富田城は、平家の侍上總兵衛景清の築きし處にして源氏の世となりて佐々木義清の領となり、塩谷判官高貞まで相續で



此處に住む、高貞滅びし後、佐々木治部少輔高義、足利義滿將軍より雲州の守護を贈りて入部し、富田城を修築して居城となし、星移り時換りて尼子經久の城となる。然るに城の詰の丸に、櫻の間柳の間と云ひて、櫻柳の繪を書きたる處あり、圖書の妙う鬼神や執りけん。いつしか大鬼處となる。何百人宿直すと雖も、皆怪物の爲めに誑されて、或は心神惱亂し、又は行衛もしらず失せければ、彼所は假にも人の出入する事あたはずなりぬ。尼子經久の二男宮內大輔興久は之を聞き、何條さる事の有る可き。一心目にあれば、空華亂墜すと云ふ事あり。住人の心の臆するが故に無き物の目に映つるならん。いで興久かの怪物を降服せしめんと云ひて、唯一人彼の間に至り上座に箕踞し、燈火を付けて居られける。宵の程は何の怪しき事

も無し。夜既に丑滿になり往く頃、風戰々くと吹き來り。何となく物凄しく頻りに胸騒ぎしければ、興久には不思議なりと思ひ居る所に、積る庭の木の葉を踏みしだく音して、緣の上にどつかと上り、頓て妻戸をきりそつと押開け、齡八旬にも餘ると覺しき老婆の、髪は空ざまに結び、荆棘の雪に埋れたる如くなるを、颯と亂し、眼光は鏡の如くにて一つあり、日月の光よりも猶爛々たり、鼻高く、齒は黄にして長く、上下丈牙の如く生ひ違ひ、殊に兩の牙鋭利にして劍樹氷柱に等し、唇赤く口は耳の根まで裂け、出づる息は炎火の如く、怒れる猪の毛の如きが腕に生し、爪長く曲りて鷲に似たり、麻の衣を首て九節の竹枝をつき、十一二計りの兒童二人に手を引かれて來る。あら苦しや、哀れ老ほど辛き者はなし、吾齡二八の春の頃は、



風揚柳の腰を重し、露排季の顔を洗ふと云つて、揚貴姫が翠黛を學び西施が新粧を學びし身の、日となく夜となく衰へて、髪落ち齒豁はに、膚の色褪せ、胸苦しのみ增り行く、南無阿彌陀佛〳〵と云ふ聲頻りなり。興久も身の毛竪つ樣覺けれ共、些も騒がず居りしを、老婆屹と見て、これに若き大將の御座すぞや、日頃此處には老婆が折々參り遊ぶ處に仕候へば、一人も渡らせ給はず、物寂しさは日に增り行く、今宵は夜と共に今昔の繰言を語りて聞かせ參らす可しと云ふ。興久返事も爲し給はず、大の眼に角を立て睨んで居玉ふ。老婆は此の殿も老婆の面を見增しと思しけるにや、物申せども御答へなし。汝等參りて御氣を直せと云へば、承りぬと應へて女童ついと立つて、興久の膝下にき行跪き、興久之を切らんと思はれけれど、

化生の物を切りたりとて手柄にもあらじ、拳にて打ち倒して事の樣をも見んとて、力に任せて撲たれければ、童は走りて荒らけなし御打候と云つて泣く、老婆更に、然らば汝參れと又一人の童を遣はしけり。興久此の童を引寄せ、膝の上に据ゑければ大磐石の如く重し頭を續けて二つ三つ打ち、掴んで曳きやつと擲げれば、之れを見て老婆、あれ程にいた氣したる童共を、情なく扱ひ給ふものかな、此の御恨申さんと、立上るを見れば、音に聞えし三途の川の老婆一里塚安達原の惡婆の如き眞黑の手を差しのべ、興久の頭を掴んで飛んでかゝる。興久少しも騒がず、腰に差したる初櫻の刀を拔くと齊しく眉間を續げて二刀斬られければ、あつと云ふ聲ばかりして電光の如く虚空に去にけり。夜明けて後、此處彼處と尋ねければ、正しく



緣の下に入りたる樣なり、緣の下に這入りて見れば、大なる穴あり頓がて是を掘り行けば、二丈餘り下に高さ九尺許りなる五輪一基、三尺計りの五輪二基ありたり。興久之を見て、偖は此の骸骨ども、此の家に壓されて、その苦しさに、顯れ出るなるべし。他所に移して葬らば、此の城の守ともなるべしとて、淨安寺の後に埋ゐて供養の追善を營みしかば、其の後は怪物の來ることも無くなりしとなり。

## ○法師の祟

信州の或る所の地頭、其の所領の中に有德の山寺の法師ありけるに、事を左右に構へて其の資財を悉く掠め取りにけり。法師鎌倉に

上りて上奏しけれども、願意達せずして病死し了んぬ。其の靈魂地頭の妻に憑りて病ましめて云ふ、我れ何の過もなきに家財を人に奪はれて斯く果てしにき。如何にも口惜しければ女房も取り殺すべし、次に殿も子息達も一人も殘さず取殺すべしと。地頭これを聞いて痛く恐れをなし、先に取りたる資財を悉く返して、何卒前罪を宥させ給へと、神にも誓ひ佛にも念じたれども、罪科の深きことゝて尙も心安かならず、續いて一心不亂に神佛を念じければ、やがて神佛も感應ましけんゝ病める妻の云ふ樣、左程神佛に眞心を捧ぐる上からは、汝の前罪を宥すべしと云ひて、口中より三四寸計りの釘を吐き出し、これは法師在世の時汝等を咀はんが爲め、鎌倉にて濱の大鳥居に打ちたりしものなり、其の釘を打ちたりし石は卽ちこれなりと、



續いて大なる石一つ吐き出しけり。

次に云ふ樣此の仕業をなす某は一匹の蛙なり、耻しけれど我が姿を見せ申さんとて、又も吐き出しけるは蛙なりき。地頭にこれを取りて竹の筒に入れ、祠なと建てゝ厚くこれを祀りたり。これは左右古き事にあらず近き頃の事なりとぞ。

## ○老狐周章てゝ燈具を落す

狐火とて、遠方より見るに青き火燃えて消ゆることあり、或人云ふ、我が宅の邊に度々ある事なり。思ふに狐の頭を上けて息を吹く毎に火出ずるものなるべし。

我れ豫州に有りし時、我が方に出入する百姓あり、ある夜厠に行く、此の邊狐甚だ多く、常に火を燈せるが、此の時一つの狐厠の外に來て居たりしが、彼の百姓急に厠より出づるに驚きて逃け去らんとして、何物かを落せり。百姓是れを取りてよく見るに、骨の樣なるものなり。不思議に思ひて箱に入れて置きしに、其の夜狐、戸外に來て、先程我が落せし者を其許拾ひたり、早く返し給へ、其許に有りても益なき者なり。我方にはなくてかなわぬ者なりと云ふ。

百姓云ふ、吾れ物を拾ろひたるも何物なるかを知らず、あれは如何なる物なりやと問ふ。狐の曰く、あれは火を燈すものなり、早く下されよと、しきりに頼む故に百姓出して遣はしければ、狐悅びて歸りぬ。其の後その返報にや、時々草履五六足家の縁の上に置きて



あり、扨て奇特なる事かなといふて過きしが、同村の者にて草鞋を作りて賣る者ありしが、此の狐の話を聞きて、彼の百姓の方へ來り云ふやう、我等が作る所の草履折々四五足づゝ紛失せり、尤も人の盗むべき所にあらず、あやしく思ひ居たるに、扨ては狐が取りて、其許に進すると見えたり、我れ作る所の草履持參せり、較べて見る可しとて見せたるに、少しも違はず、同じ作りの草履なれば、その時二人にて大笑せしとなり。

## ○豆つまの妖

過ぎし年我が手許に、幼くて幽境の山人に伴はれて、年久しく使

はれたる寅吉と云ふ者の居たりしが、文政四年の五月の某日に、火の穢れの物語りに及びて、穢火のもとは伊邪郡美命の火神を生み給へる時の後の物より起れるなり。伊勢の神宮の御定めにも、産火を重き汚れと立てられ、胞衣を納めたる者の穢を口火と定られしも故ある事なりと、語り合ひて在りけるに、寅吉傍らに聞き居て、豆つまと言ふ者あり、知り給へるかと云ふ。吾も人も知らずと答ふれば已曩に山に居たりし時に、友たちと連立ちて月夜に里近き野に出でけるに、長さ四五寸ばかりなる少さき人の髪の生ひたるが、七八寸計りの少さき馬に乗りて、甲冑を身に著て、弓鎗太刀など種々の武器を持つていと數多く現はれ出で、入交り合戰する樣を見たり。甲冑の製また鎗の鋒、太刀の刃の光りなど人間のものに異る處な







し、いと怪しく覺へて捕へ見ばやと思へども、神速にてなか〳〵捕へがたく覺へしかば、小石など交りたる土を取りて、散々に打ちつけたるに、何處ともなく、皆見えずなりぬ。

後に何にかなきかと求めたれども、何物もなく、唯石塊などに血つきて有りしなり、山に歸りて其の事を師に申せしに、其は豆つまと云ふ妖物にて、産の穢物卽ち胞衣を納むることを等閑にすれば、土鼠を生じ、それが斯る怪をなして、小兒を惱ましむるなりと敎へられたり。これは小兒の時のみならず其の人の生涯にも妖をなす物なり。

されば胞衣を埋むる時には、少々精水をその器に入れて藏むべし。然る時は豆つま生せず、總べてウゴモチは人血の土に塗れたるより

生じて、子をも蕃殖する物なりと云ひ傳へりと語られたり。

## ○取られた玉を取返す

元祿の頃、上京の人鴨川に出で、夜網を打ちけるに、加茂の邊にて狐火手許に來りしかば、取り敢ず網を打ちかくれば、鳴聲ありて網の中に光るもの一つ殘れり。それは玉の如きものにて光り赫々たり。家に歸りて翌日之れを見れば、その色薄白く鷄の卵に似て、晝は光なけれども、夜に入れば輝きけり。夜行の折から提灯に之れをうつせば、蠟燭よりも明らかなり。故に我か寶と喜び秘藏し置きたり。



ある時又夜網に出で、彼の玉を紗の袋に入れて、肘にかけて網を打ち居たるが、大なさ一間ばかりの大石と覺ばしきもの、川へざぶんと落ちしが、その爲め川水四方飛び散りたり。

是れは如何にと驚きし途端に、彼の玉の光り消え失せたり。依て袋を探り見れば、袋破れて玉なく二三間向ふにて光あり。扨ては狐に取り返されたると口惜しかり、網を捨て、追ひ行きしが、遂に取る事出來ずして、空しく歸りぬとなり。

## ○天女人の口中に異香を移す

松平陸奥守忠宗の家來番藤孫右工門と云ふ者、或る日の事已れが

宅の座席に晝寢して居る所へ、天女天降りて、孫右工門が口を吸ふと夢見て、覺めて邊りを見たるも人氣もなく、去りとて思ひも寄らぬ夢を見るもの哉と思ひ、人に語らんもいと耻しくてぞ居たりけるが、其の後よりして彼の孫右工門が物を言ふ度に、口中異香を薫じける程に、側に居ける人々是を不審に思へ合へり。

其の身も又不思議に思ふ處に、心安き朋輩の申す樣には、足下は怠らぬ深き嗜みにや、いつ迄も口中香しき事唯々匂の玉を含めるが如し、是れ奇特千萬なりと云ふものなり、其の時孫右工門、今は隱すも益なしと去る時に有りし次第を語りしければ、彼の友奇異の思をしたり。

扨て孫右工門美男と云ふにあらず、又何のしほらしき事もなき男



振なるにいかなる思ひ入ありてか、天女はかゝる情をかゝけん、其の道理知り難し、去ればその香は、一生身の終るまで消えずして薫りけるとなん、是れ田村隱岐守の家來、佐藤助左工門重友が語れるところなり。

## ○骨繼ぎ妙藥

播磨の國佐用郡の或處から出る骨繼の妙藥は、河童直傳と云つて世の人大にこれを信仰せり。其の因緣は或る武家の家に關係したる事にて、項は寶永年間の出來事なり。

或夏七下月旬の事、殘暑烈しく駒も厩に居堪えぬ位の暑さなれば

野飼のために駒を河端に引き出し、木蔭の小さき柳の木に繋ぎ置けり。暫らくする駒は何か知れぬ物を身に引いて、ひた走りに厩を指して歸去りたり。

是れを見た厩仲間は、不思議に思ひて後を追ひ行きて見れば、向ひの隅に駒は片息して居る傍に。猿のやうなるものゝ手綱を身に纏ひ付けて屈み居れり。

仲間は駒を柱に結び付けて、其の猿の様なる物を引出して、庭の柿の木に結付けて能く見れば、容態は猿にあらず、頭の上に少し窪みがありて、髪は赤松葉の如く、木猿位の大さなり。是れは豫ねて聞く河童であらんと云合へる中に、頓て主人歸り來たれば、此の事を委細話せば、主人は、「已れ憎き奴なり、此の川筋にて折々人の失



せることあるが、皆己れが仕業なる可し。嬲殺にして呉れんと、大に眼を怒らし、脇差を拔きて右の手を打ち落せば、河童はしほ〳〵として、涙を流し、「我今日馬を淵に引き入れんとして、誤つて引連れられて來て憂き目に逢へり。命ばかりは助け給へ。今よりは御一門は申すに及ばず、當村の衆は少しも手を出さす候と云ふ。主人の申すには、素よりその方を殺しても自身の手柄になる譯にもあらねば、品に依れば、助命しても好し、誤證文を書く可し、と云ふ。河童は「我は物書く事は出來ず、其の上手もなく候へば免し給へ、御慈悲に先刻の切り給ひし手を御返し下されと言ふ。主人「切つた手を返しても繼ぐ事はなるまじ、乞方に置いて汝を捕へし印となすと云へば、一向頭を下げて、是非とも御返し下さる可し、御歸し下さ

れば、今宵の中なれば、元の如く繼ぎ申さんと云ふ。主人「如何にして繼ぐかと云へば、「己れ藥を調合してといふ。「然らば手を返す可し、其の方の藥方を我に傳へよと言へければ、「命の代りなれば安き事にて候と、人を拂らひて密に秘方を傳へければ、懇に認め取りて彼の手を戻し、河童を川に放ちたりとなり。其の後は川にて人も失せず、殊更らに藥方奇妙なるを以て、これを子孫に傳へたものが遂に世の評判となつてけり。

## ○狐火は馬の骨か

狐の灯を燈すことは衆人の知る所なり。如何なる術にて燈すか、



知り居るやと云ふに、馬の骨を咥へて燈すと云ふものあれども、慥かなる事は未だ知る人なし。小雨など降る時の夜は殊に多く燈す樣なれども、それも又何故なるか分らず、思ふに狐の慰みに燈して人に見するものなるべし。

或夜五十も百も並べ燈して向ふより來ることあり。やがては近く來るに相違なし、如何なる物にて燈すものか見顯しやらんと思ひ、小雨降るにも拘はらず、傘をすぼめ田の中に下り、稻の中に隱れて見て居たるに、だん〳〵と火を燈して近寄り來りぬ。依つて直ぐ側にて能く見たるに、唯火計りにて、早や五十斗りも行き過きたりと思ふ頃、聲を限りにヤッと叫んで道に飛び出づれば、狐も思ひ設けぬことゝて仰天し、足元にて一聲キャッと叫んで、數十の火は一度

に消えて失せにける。跡は眞の闇になりけるが、餘りに彼等が足元にて一生懸命に鳴く故に、此方も驚きて傘にて一つ二つ盲打ちに打ちたれども、何の手應へもなし。唯馬の骨のやうなる物がありたると云ふ。

## ⊙魂魄中有に迷ふ

三州と信州の堺に新野村と云ふ所あり、其の村に七郎兵衛と言へる義俠者あり、此の者壯年の頃同州飯田邊に在りし時、其の近邊の民家に夜な々々怪物出るよしにて、家主其の家を立退き竟に廢家となる。時に七郎兵衛彼の家に至り止宿する事三夜、曉方目覺たれば



丈七尺計りの妖女來りて添臥しす。七郎兵衛起き上つて、彼の妖女を押へ押にて縛り、汝何者なるや正體を顯はす可しと、きびしく責むれば、彼の妖物答て曰く、吾は此の家の裏にある柳の精なり。非情の物たりと雖も、數百年の星霜を經て、魂魄宿りて宇宙に迷とり冀くは佛事をなして吾が冥闇を救へ給へ、我此の事を語らんため、時々當家に來ると雖も、足下の如き勇悍の人なく、諸人は我を怖れ逃去る故に、云ひ寄るべき由なく空しく年月を過せりと謂ひて涕泣し、暫らくあつて妖女は消失しぬ。夫れより七郎兵衛、彼の柳の木を伐り、これを賣り鬻ぎて一寺を建てゝ、妖女が菩提を吊らひしより、其の後は怪異なし、斯して七郎兵衛は、耳順の頃より、專ら菩提心を發し、諸州の靈地を閲歷し、夫より古里に歸り、同村瑞光院

の山へ入り、銅の笠を被り鐵の履物を穿ち、手に錫杖を持ち、岩上に座して物故せりと云ふ。其の形骸は貞享中より當時迄、凡七八十年に及ぶと雖も、材狼等の害なく、少しの朽損する所なくして自若たりと云ふ。

## ○大名行列と嫁入

或る所に吉松と云ふ馬方渡世の者あり。其の家に鐵と云ふものを抱へ置きたり。夜の引き明けに馬を牽きて家を出でたるに、村の離れの藪蔭に狐三四疋寄合ひ居たる故に、礫を打ちたれば驚きて逃げ失せぬ。



鐵は夫れより遠方へ馬を牽き行きて、夜に入りて常の如く何心なく細道を歸り來るに、大名の通り給ふに行き逢ひたれば、遠慮して片寄り居り、漸通行も過ぎたれば馬を牽き出したるに、又々大名のお通りありて、通路成りがたく、纔か二里程の達を二時半計りかゝりて漸く家に歸りたり。此の日吉松も同じ方に馬を牽きて行きしが途にて聞けば、鐵は二里程も先きに行けりとの事故、其の積りにてありしに、斯く遲れて歸りしは何故ぞと問ふに、今宵は又も又もと引き續きて大名に行き逢ひて、大きに手間取りしと言ふ。吉松曰く我等も同じ道を來りしに、何にも逢はず、何をとぼけ居るやと言へば、いや左に非らず正敷き事なり。控へよ〳〵とて散々に罵しられたりと云ふ。夫れは狐の仕業なり、化されたるものなりとて、皆々

笑ひ合ひて夫れ成りに寢たりしに、間も無く入口をとんと叩く者有り誰ぞと問へば中津屋より來れり、客三人あつて、少し斗りの荷を附けて馬に乘りて行き度しとの事故、一人を賴みたしと云ふに依りて、行きてもよし唯一人かと問ふ、三人入用なれども二人の馬は他にて出來たり、今一疋にてよしと云ふ。去らば行くべし、二人の馬は誰が行くぞと問ふに、助の馬に三の馬なりと答ふ。少しも早く來る可しと云ひ捨て、中津屋の者は歸りぬ。

夫れより鐵は馬に飼ひを與へ、己れも冷飯にて食事をなし、馬を牽きて、先づ助の所に誘ひに行きたるに、一向に知らぬといふ。不審に思つて直ちに中津屋に行きて見るに其の氣色なし、起してしか〳〵の故に來ると云ふに、今宵此方の人は三人ならではなし、



それも明朝四つ頃より、岐阜へ行く客なり、門違にやあらんといふ。夫れより三の方に行きて尋ねるに、矢張何事も知らぬと云ふ。

そこで能く考ふれば、今朝狐に石を打ち付けたることあり、それが爲めならんと氣付き、憎き事とは思へども詮方なく立歸りぬと吉松に語りぬ。

さて其の聲は正敷く人の言葉なりしかと問ふに、人の通りなれども舌の短かき人の言葉に似て居たりと答ふ。

偖て又た外に狐の化けたのを見たりやと云ふに、夜分大行列の嫁入に遇ひたる事ありと云ふ。

狐の嫁入りは繪本にもあるが如く、顏は狐にて體は人にてあるかと問へば人に少しも異る事なしと云ふ。

# ○河童の少年

紀州高野山の平等院に、河童の人に憑つた由來を、自ら書いて其の中に自體をも畫きたる不思議なものがあると云ふが、又尾州名古屋の川合と云ふ人が明和九年の七月中に其の友の山岡氏に語つたと云ふ不思議の實蹟が書物に書いてある。

川合氏は强力の大男であつたが、寶歷三年七月三日の未明、名古屋の近き老瀨川の邊を、朝霧の中を歩いて行くと、川端に一人の小年が立ち居たり。柿色の惟子に黑い帶を締め、頭は中ずりを爲し居たり。川合氏が小僧何處に行くかと咎めると、少年は椿の森より水



車に行くと云ふ。椿の森は老瀨川の上にあり。川合氏は少年の傍を通り脫けて先に行かんとすると、彼の少年は、いきなり河合氏の帶を取つて引き寄せたり。河合氏振り放して後を向き、これぞ年頃人を惱むる河童ならん、生かして置く可きに有らねど、今日は殺生禁斷の日なれば助け置くぞと言へば、少年河に飛び込みぬ。河合氏堤に煙草をふかして見て居れば、又も少年は出でんとせり。河合氏出てはならぬと叱れば、河童は「是までに其許の如き强き人に出逢つた事なしと言つて、又河中に飛び込みぬと。河合氏がそれを見て歸りがけに、山岡氏に語りたる實話なり。

## ○相手のない立合

寛永の頃肥前天草、島原、有馬の此の三ヶ所の百姓一揆を起せし時、悉く其の御退治が濟んで、有馬左工門佐直純歸陣の折柄直純の部下の八左工門と云ふ者、音に聞えた蓮池を見て其の邊を逍遙して居たるが、池の緣に一匹の河童前後も知らず貴寢して居たり、九左工門立寄つて拔打ちに一打ちすれば、手應して刀にものゝ付いた樣なりしが、忽ち其の姿を見失ひたり。

暫らくして何やら河中に躍り込める音せしが、其の死骸と云ふものも見えず、八左工門日暮近くまで池の端に待つて居て見たるが、



何の變りも無かりき。

其の翌日は主人歸陣の日であるから、八左工門も供して日向の縣城に歸れり。（有馬と縣とは四十里の行程）其の儘寛永十五年の二月から十七年の秋九月までは何事も無くして濟んだるが、九月の十四日の午後二時頃と云ふに、八左工門の住居に河童が突然に尋ね來れり。

やがて八左工門の居間に這入り來て。八左工門を白眼んで云ふ。「三年以前に肥前有馬にて御身に受けし疵が、漸く今日此頃平癒したれば、其の遺恨を霽さん爲めに、遙々參りたり、急ぎ外に出で勝負仕給へと云ふ。八左工門は之を聞きて莞爾として、「遠路の處能くこそ來れるものかなと、刀を引提げて庭上に出立ち誰れも相手の

ないのに立合はんとせり。……母と女房は此の有様を見て、こは亂心せしにあらずやと膽を冷やせしが、幸ひ其の裏は百石小路と云つて小身物の屋敷なれば、人を遣はして親類を呼び友を語り、此の體を見せければ、成程狂人に似たる所なれども、又然らずと思ふ所もあれば、何れも唯見物して居るのみにて、誰あつて助太刀する人もない、こは彼の河童が八左工門には見えても餘人には見えざるが爲めなり。

斯く二時間ばかり互に打合ふて、相互に疲れければ、さらば今晩は相引にして、又明日の事にせんと、河童は其の儘立歸れり。そで八左工門も刀を納めて内に這入て來たれば、皆々打ち寄つて今の事を聞くに、八左上門は三年前の有馬の事を物語りければ、何れも手



を打つて、偖ては其の事を忘れず、是非共之れを報ひんと年月彼が思ひ込みしためなるか。して又た彼の持つたる得物は如何なる物かと、主人に尋ねると、彼の獲物は梅の素生えのやうなる三尺斗りも有るものにて、それが人に當つて如何に痛きか知らざれども、實に彼の業は敏速にて、言語に絶えたりと云へり。

其の事柄を宿居の近侍から、主人有馬直純に聞えしに直純の仰せに、「左樣の儀は前代未聞の事である故に、八左工門の所に往きて、譬へ河童の姿の見えぬまでも、見物せんと仰せられて、翌日彼れの宅に御來臨あり、近士に申付けて、河童の逃げぬ樣にと幾重にも取り卷きて待ち居たり。

河童は如何したるか、其の日は姿を見せれば、直純公は少々御不

興顔にて御歸城になされたり。其の夜八左工門の枕元に河童姿を現はして、「年頃の遺恨を是非晴らさんと思ひて、遙々これまで參りたれども、今晝頃に其の方の主君も見えられて、雌雄を御一覽あるべしとの事なれば、最早我が存念に及ばず、それ故に明日は有馬に立歸る可し、此の由語らん爲めにこれ迄參りたりと言ひ捨て立ち去りしとぞ、依て翌日八左工門も此の由主君にも申し上げたりと語りたり。

## ○老狐寺院を護る

近江八幡の近邑由中江の正念寺といふ、一向宗の寺に一匹の狐住



みたり。爲めに其寺は火災などを防く事は元より住僧の他へ法事などへ行く時は守護して行くとなり。

人の眼に見えねば、或る時彼の僧のはける草履の上に物かけし人ありしに、歸りて後ちにもの陰より人語して、吾草履の上に在りしに御坊の草履を汚したるものありと大いに怒れるを、住僧聞いて、汝の姿は人の眼に見えねば詮方なし、怒るは無理なりと諭せしかば其の理に服したりとぞ。

此の狐の語る所によれば、凡そ吾が黨に三段あり、主領といふは頭にて其の次を寄方といひ、其の下を野狐といふ。人に禍を與ふるは大方野狐なり、然れども野狐は其の主領にあらざれば制し難し、主領は所々に住めり。若し他の主領の下の寄方の野狐を制すれば怨

みを受くる事深し。一旦の怨み永世忘るゝ事なきは人よりも甚だしとなり。

是れは狐付き●事を彼等に頼みて問はしめ時の答へなり、凡そ問はんと思へば書付けて本堂に差し置けば、其の答も亦書きても見せたり、又は人語を以ても答へたり。

此の狐住僧を敬すること君の如し。ある時狐に向ひ金の不足せるを助力せられんことを請ふ。狐早速これを承諾しければ、其の許の金は如何にして得たるやと問はれしに、本堂の賽錢の箱に入り溢れたる折り拾ろひ置きしなりと答へたりと云ふ。

## ○遊魂の話

後奈良天皇の天元年中に、周防山口の城主大内義隆の家人、濱田興兵衛といふ武士あり。室の津の遊女を妻とせり。

容貌美しく、心さま情深く、風流の志歌道の心得あり、手も美しく書けるが、濱田の妻となり、互に妹脊の語らひ、此の世ならずと思ひける。

主君義隆、京都將軍の召しにより上洛して、久しく都に逗留あり此時濱田も召し連れられたり。妻これを慕ふて、間もなく時なく、待ちわび居たり。頃は八月三五の夜、空も曇りて、月のみ見えざり

ければ、

「思ひやる都の空の月影を
幾重の雲がたち隔つらん

と打ちながめ、寢られぬ枕をひとり傾けて、あかし兼ねたる夜を恨み臥したり。

其日義隆、國に下り給ひて、濱田も夜更るまで城中にありて漸く家に歸る。家は惣門の外にあり、雲掩ひ月暗くして、定かならず。道の傍半町斗りの草むらに幕打ち廻し、燈火かゝげて男女十人ばかり、今宵の月に憧がれて、酒宴を張ると覺えたり。濱田思ふやう、國に歸り給ひて家々喜びをなすに、誰人か今宵、此の處に出て遊ぶらんと、怪し思てひそかに窺ひ見れば、わが女房



も其の座にありて興じ居ける。こはそも如何なる事ぞ、まさなきわざかなと、猶その有樣をつくゞと見居たり。

座上にありける男云ふやう、いかに今宵の月こそ殘りおほけれ、心なき空やこれになど一言のふしもおはせぬかといふ。濱田の妻辭しけれども、人々强ひて、歌詠めとすゝむれば、

きりゞす聲も枯野の草むらに
月さへくらくいと更にけり

と詠みければ。柳陰に隱れて聞きける濱田も、あはれに思ひつゝ涙を流す。座中の人はさしも興じて、頻りに盃をめぐらせり。かくて十七才頃と見ゆる少年の前に、盃あれども酒を受けず、座中强ひければ、此の女房の歌あらば飲まんといふ。女房の一首こそ、思ふ事

によそへても詠けれ、此の上は許し給へといふに、聞かざればとてからなん。

「ゆく水のかへらぬけふをおしめたゞ
若きも年はとまらぬものを」

盃あるかたに巡りて、濱田の妻に、また、歌うたへ給へといふに今様一ふくをうたひて、

「さびしき閨のひりねは、風ぞみにしむ萩はらや、其すぐにつけ音づれの、絶えても君に恨みなし、戀しき空に飛ぶかりに、せめてたよりつけてやらまし」

其座儒學せしと見えし男、いかゞ思ひけん、涙ぐみて、

螢火穿二白楊一　悲風入二荒草一



疑是夢中遊　愁拂一盃酒

と吟詠しければ、いかでか今宵ばかり夢なる可き、すべて人の世はみな夢なるものをとて、濱田の妻坐ろに涙を流す。

座上の人大に怒りて、此の座にありて涙を流す、いまいましさよとて、濱田が妻に、盃を投けつけたりしかば、額にあたりたり。妻いかりて座の下より石をとり出し投けたりしかば、座上の一人の頭に當り、血走つて流るゝ事瀧の如し。座中驚きて立ち騒ぐとかと見えしが、燈火消えて、人もなく唯だ草むらに、虫の聲のみ殘りたり

濱田大いにあやしみ、さて我が妻空しくなりて、幽靈のあらはれ見えけるかと、いと悲しくて家に歸れば、妻は臥してあり。やがて起きあがりて喜びて語るやう、餘り待ちわびて交睫みしかば、夢の

うちに拾人ばかり草むらに、酒飲び歌をのぞまれ。そのなかにも君のみ戀しさをよそへて、うたへたれば、座上の人みつからが涙をながす事を忌みて、盃を投げかけしを、みづからは石を取りて打ち返したるため、座中騒立つと見て夢さめたり。盃の額にあたりしと覺えしが、夢さめても今に頭のいたく覺ゆ。其の時歌や詩はかく〳〵と語りたり。見聞きたるに少しも違はず、濱田つく〳〵思ふに、さては柳陰に隱れて見たりし事は、我が妻の夢の中の事にて、ありけるよと、互に語りあふて、其の奇異なるに驚きたりといふ。

## ○老狐の爲めに淨瑠璃を語る

和泉國日根郡佐野村と云ふ處に、浦太夫と云ふ義太夫節の淨瑠璃をよくする者あり、五畿内にて十人の語手一人なりき。

これが爲め常に佐野村から大阪の座に通ふを常の業とせり。佐野は岸和田の城を去る事五十町にて、大阪を去る事凡道のり九里許の處なり、

一日浪花よりの歸途夜に入りて、同國泉郡布野といふ所を通りしに、（布野は浪花より紀州への往還にて、高石といふ所の三昧寺の有る處なり。高石は古たかしと云ひては卽ち高しの濱なり）。ふと人と道連れに來りしに、一人のいふ、先刻より說話を承るに、音に聞き し浦太夫のよし、自分はこの布野の下在なる（此の邊にて山の在る上と云ひ濱の方を下と呼ぶ）某村の者なるが、此所に行逢ひしは幸

ひなり。何卒今より我が方へ來りて、一曲語り聞かせ給はる可しといふて、浦太夫を其の家に伴ひ行きしに、大なる農家にて座敷へ通し休息させ置く間に、大勢あたりの者を呼び來たり。

主人盛んに酒肴を勸むれども、浦太夫いへるは、あまり多く飲食をなせば、飽滿して淨瑠璃を語るに迷惑なり。先づ語りて後に賜はれとて、一二段語れば、坐中ひつそりとして感に堪えざる有樣なり又暫らく飲食して居たりしに、座客又々語らんことを求む、則ち其の乞ひに任せて數段を語りしが、席上のもの一層感に打たれて息をもせずひつそりせしに、心をつけて見廻せば、人獨りも居らず、眸を定めて見るに、夜は少し白みて東の方明けかゝる頃にて、今迄座敷なりと思ひし所は、あらぬ布野の三昧なり。



浦太夫は仰天して歸らんとせしに、夜はほの〳〵と明渡り、見れば草茫〳〵たる墓所なりけるに、ぞつとして早々家に歸りたるに、全く夢の如し。されば飲食せしものは、定めて世に言ふ馬糞と馬尿にてありしかと思はれ、何となく胸惡しく心も心ならず、恍惚として正しからず、數日煩らひて打け臥したり。

其の頃泉國中にて、佐野の浦太夫は狐に化され、狐から淨瑠璃を望まれしなどと、評判せる折柄、或人言ひけるは、其夜浦太夫に供せは不潔の物にあらず、その夜近村に婚姻の禮ありしに、其の用意の膳部殘らず失せて跡方もなければ、定めて狐狸の所爲ならんと思ひて、其の家にては別の料理を調へたりと聞く、されば布野の三昧には、魚骨杯盤散亂れて、左ながら人の飲食せし如く狼藉たりしと

ぞ。

之れを聞けば、浦太夫の食せし物は實の食品にて、野狐藝に感じ酒食をもてなして、淨瑠璃を聞きしならんとの取沙汰故、浦太夫の病氣も追々平癒せしが、其の後は太夫を止めて、外の生業いをして世を送りてありき。

## ○僞觸書三通

正德の年號のまだ初め方の事なりしが、姫路に年行司所へ、先觸一通倒着す。

其の文に曰く、



此度、御典藥木下雲菴一人、肥前國長崎藥草御改懸二御用一致二差遣付一御朱印人足四人被二下置一間、員數御證文之通、往來共宿々無レ滯可二差出一者也、正德二年辰三月日

包紙の上に御證文之寫とあり、外に一通有り其文に曰く、

覺人足四人、右者此度、木下雲菴して御改爲二御用一肥前國長崎、罷越候付、被レ下候間、宿々無レ滯差出可レ給候、此上、三月日、木下雲菴內山本伴七

とある觸書到來に付き、宿役のもの人足の用意をして待ちゐたり。

果して翌日になれば、乘物結構にして、醫者年五十餘りに見えて有髮なるが、乘物の中に卷臺に向ひて居たり、其器量極めて宜しく若黨草履取、長刀持、鋏箱供廻りは三人なり。

かくて三日の後に又一通到着す、其の文に曰く、

此間之一藥草御改爲二御用一醫師一人幷從者三人、肥前國長崎へ相下、宿々御朱印人足にて相通り候旨、粗相聞之候に付、追々遂二吟味一候所右左之者狐にて、宿々誑かし相通り候樣子相聞え候、此後右之若共罷歸候はゞ搦捕り候共、其所之者共如何樣共可二相斗一者也

月日、宿々

と在り、是れを聞くものども横手を打つてけるが、後に聞けば、播州斗りの事にて、跡よりの觸者も狐の所爲と聞えし。

## ○天女將門と契らせ給ふ



平の將門は、人皇五十代桓武天皇の王子葛原親王の御子なり。

性質飽まで猛勇にして鬼人も恐るれども、常は容顏美麗にして、艶言好色あり。又怒る時は天魔も逃出すべき勢ひ、實に類ひ無き方にてぞ御座しける。

此君神通を得給ひて、身を樣々に變じ、奇異の相ありし事諸祿に見る處なり。

初めて下總の國の相馬郡を領せしにより、相馬小次郎と呼びたり。後に關東八州を領するに及びては、佐倉に住居し給へり。

或る時、佐倉の領内の、面が池と云ふところに逍遙し給ひし時に、池の汀に當り、一人の天女出現し遊樂しつあつた。

其の姿の風俗を離れて。芙容の顏端花の唇も只ならざる程の美貌

なれば、將門奇異の思ひして立ち寄りて、見給ひしに天女の羽衣を脱き捨て舞樂をなすにでありける。

將門密に伴へ羽衣を奪ひ取りて、不知の體にて天女に見ん事を乞ふ。天女驚きて急ぎ天上せんものと、邊を見るに羽衣なし。是れなくば天上へ上り歸ること難し。何者の持行きたるかと愁號し給ひしも、將門尙知らざる體にて在せしかば、遂に天通の術盡きて、下界の徒となり、唯泪を流して居るのみであつた。

將門天女の容顏に心浮れ、たとへは君が空に上らば、倶に連れても天上せんか、雲の通ひ路吹き止めよ、乙女の姿しばし我家に止てんものをと、忽ち天女を誘ひて館に歸らせ給ふ。斯くて天女に契りを籠めて、偖老洞穴の語らひをなす。彼の唐の楊貴妃の契にもあら



ざる樣なりき。

斯くて月日を重ねて、御子三人設け玉ひ、十三年の春秋をぞ暮らし給へり、御子は何れも男子にして、總領は千葉助、二男相馬、三男は東の少輔なり、斯る目出度き御仲睦しくてぞ渡らせ給へり。

或時天女仰せけるは、我れ久しく羽衣を見ず、昔戀しく候へば、一目見せばやと仰せける、將門聞し召し同棲十三年の馴染重ねし上に、子供迄も御座せば、今は御意を隔て玉ふべき道ならずと。件の羽衣を取り出して、天女見せ給へば、天女是れを受取りて、やがて御身に著て、「吾れ羽衣なくして天通なすこと能はず、空しく下界に住むこと十年餘り、もはや御暇申すと言ひ殘して、忽ち天上なされ

將門倶にと思召せど力なく、唯茫然と深く呆れ給ひける。斯くて後は、將門一心に天女の事のみ戀慕ひ、思ひ詫びたまふ餘りに、天女の姿を繪に留めて、一間にかけ朝暮の傳びき侍るより他事なしてありしとなり。

## ○白狐吾が子を思ふ

人も善く知る、物臭太郎とてありしが、ある年に妻に遲れてより鰥夫にて農業をなし居たるに、其の翌年田を植る時分になりて、早乙女を雇ひし中に、稲を植る事三四人前の働きを爲す女ありたる。其の外内外の賄ひなど心付きて取締り、雇人の樣には見えざりける



る。

物臭太郎も、今は妻なければかの女を妻にせんには、萬事廻りよしと思ひて、ある時密かに、妻になりて此の家を賄ひ呉れずやと云ふ、女も終に承知して、夫れより妻となり、年來の夫婦中もよく男子一人を生みたり。此の子三歳の時、父物臭太郎の野から歸りて邊を見れば、妻は子に乳を添へて臥床に在り、物臭太郎その姿を見れば、着物の裾より狐の尾見えたり。

太郎驚きて窃かに其の場を去り、外面へ出で、さて〳〵怪しや、これまで常に並々の女かと思ひしに、左にあられずして、今日までも好き妻を得たりと思ひしは狐なり。

我れに因縁なくば、是迄で隨ふ筈はなし。併し今日は思ひも寄ら

ずその本性を見顯はしたり。さて〳〵氣の毒の事をなしたり。此儘にして置くに若くなしとて、又改めて野良より歸りたる風をして、騷しく内に入れば、女は驚いて起き出でて來たのを見れば矢張常の如くにて、其の日はそれで終つたのである。

翌日太郎は又野に出て行く、正午頃宿に歸りしに、三歳の子の母の居らぬに泣き暮して居た。

太郎驚いて、扨ては昨日彼れの性體を見あらはたのを知つて、其の姿をかくせしか、さて〳〵恨めしや、初めの妻に遲れ今又後妻に遲る。農業なす中に、此の三歳の子を、我れ一つ手にて何とかせん。妻よ汝の性體を現はさねば、斯樣の事は無きに是れ汝が誤なり、せめて此の子の乳の世話もなきやうになる迄は、今一度家に歸り來り



て呉れよと。獨り口說き泣きしかども、何の効もなし。

兎角する中に、農業の中に小兒の世話、彼れと言ひ是れといひ、心苦しく暮す中に、家は次第に富み榮え、其の狐の子は八十餘りまでも長へ、延享の頃まで其の命を保つて居たといふ。

其の子孫は今猶ほ榮えて、此所にて高持の大百姓となりて、今に繁昌して其の子孫多くありとなり。

## ○老狐祠の建立を乞ふ

守興和尚の話に增上寺にて、和尚留學の寮の朋輩の若僧に狐付て其の所作女の態になりぬ。

主僧に向ひて云へらく、吾れは隣舍の庭の小祠に住みしも、寮主祠を毀ち捨られしかば、住むべき所なし。哀れ御庭の側にかたばかりの物しつらひてたべ、と乞ふ。

主僧諾ひて、さらば名前ありやと云へば、答へて、元は洛西久世の者なり。數百歳の先に此の地に來りて、今は花崎と申すものなりといふ。

然らば其の花を書くべし。それを祠の鳥居の額にせんとあるに、物書くこと叶はず、去れとも手本賜はゞ書き候はん、と言ふに、花崎社と三字書きて與へたれば、夫れを見て直ちに書きたり。書ける文字は寮主の手にまさる事遠し、さて又乞ふらく、月の元日には一飯を與へ給へ、吾は喰ふに及ばずと雖も眷屬共の爲めに施すなり。



一盃の飯をあまたに施し、一日二度に食せしむと云ふ。而して主僧は自らは喰ふに及ばずと云ふが、如何にして生命を保ち得るやと詰問せられしに、それは人間と異れればなりと云ひたり。

やがて少祠成就しければ、彼の書けるものを額にして今も有りとなん。凡少し物よみ理窟なといふ人は、狐狸の憑くことを肯はず、夫れは狂亂なり、疳症なり、と言ひ笑らふもの多し。吾が知に限りあるを顧みず、事物の理を究めたりと思ふは、却て笑ふ可し、人は人の良智あれば、物は物の業通あり、予も亦た、正しく知れる所あれど、餘りに怪談じみてあれば、敢て言はず。凡そ數百年の狐は、氣ばかりにて、形はなきものと覺ゆべしとなり。

## ○鰻の坊主善根を説く

慶長十六年七月蒲生飛彈守秀行鄉只見川に毒流をなし給へり。（毒は柿澁、蓼、山椒の三種を搗混ぜでつくる）折柄此の山里へ旅行の僧あり、或る宿に投じ毒流しの擧あることを聞き、主人を呼びて云へる樣、凡そ有情無情を問はず、其の命を惜まざるものなし。承れば當太守此の川へ毒流しをなし給ふとか、これ何の益あるか、果して惡報を得給ふべし。何卒貴殿其の筋へ申出でゝ止め給へかし、これ莫大の善根なり、魚龜の死骨を見給ふとて、太守の爲め何等の御慰みにもなるまじ、實に無益の殺生とは此の事なりと、深く歎きけ



る。主人とこれを聞いて、旅行僧の慈悲心に感じて云へる樣、御僧坊の御言葉御尤至極に候へ共、最早毒流しも明日と迫り居り候上、我々如き賤しき身を以て上樣へ申上げ候とも萬御執上げこれあるまじ、此の事に就ては先達御家老に於て御諫めありしかど、御承引遊ばされずと、承り候と、これより柏の葉に粟の飯を盛りて旅僧もてなしけるに、旅僧は夜明けて深く愁ひたる風情にて何處ともなく出で去りぬ。

扨其翌日になれば、曉頃より村人騷ぎ立ち、家々より件の毒物持出でゝ川上より流しける、されば死し倒るべき筈の魚龜も仲々死ずやらず、うら〳〵としてさしも悽まじき毒蛇なんど、澤山浮び出でける、やがて又壹丈四五尺許の鰻の浮出でたり。其の腹如何にも大

きくありければ、これを割さきて見るに、栗の飯多くを食し居たり旅宿の主人これを見て、昨夜宿りし旅僧の事を思ひ出で、具に其の次第を語りければ、一村の人々さては、其の坊主は鰻の變化なりけるよと何れも哀れに思ひしとぞ、

## ○宗吾二隱士と名殘りを惜しむ

京都八十村路通は、芭門の秀才の俳士也、常に稻荷を信じ毎月深草の社に詣でける。

茲に八句に餘る僧の是れも折々參詣せしが、面を合すること度々に及びて、或時奥の院に登りけるに、かの僧に行き逢ひたり。



路通曰く、當社に於て老僧を見ること屢々なり。定めて、此の神を御信仰の人にてこそあるぬと問ひければ、貴翁も左にこそと語り合ふに、飯生三山の事でも類して數へられける。

夫れより親しくなりて、路通庵にも折々は訪ひ來る、然るに其の住所を語らず、名は宗吾と云へり、路通隱士は記緣者にて、古代の事悉しく知る者であつた。

宗吾老人に事を問ふに、五百年來は今に見る如くに委しく、六七百年は少し明らかならず。

是れに依つて路通隱士は益々記緣を得たので、睦み合ふ事三年にも成つた。

或時宗吾の曰く、我れ關東に赴くことあり。年來の名殘に、明日

勢多にて別れを惜む可しとて、其所にて互に待合ふ事を約束した。路通は、明日の約の刻限よりは少し早く勢多に行き、茶店にて待ち居たり、又向ふの茶店にも一人の隱士、之れも人待ち顔の風情にて居たりけり。

程なく宗語老人は旅裝にて來るに、左右より兩隱士は出迎へた。早くも來り給ひぬとて、三人打ち連れて、一同して名殘の酒宴を開き、互に酒を汲みぬ、時に宗吾の曰く、年來兩士の親しみは忘れ兼ねるが、此の度關東に赴く、老衰したれば歸京の程は計り難く、今まで包みたれども、早や隱す可きには非ず、吾れ元來人間にあらず狐なり。年頃稻荷の仕者司を勤め、今年任を辭したり。我が古鄕は江州彦根馬淵氏が屋敷なり、彼れこそ、我事をよく知れりなど物



語をして立ち別れけり。

兩氏唯だあきれたるが如く、暫らく言葉も無かりけり。其の後兩隱士語り合ふて、直ちに彦根に立ち越えて、今の次第を知らせ、又た其の樣子を聞かんと此處を出發した。

馬淵氏は多く田畑を有する百姓にてありしが、彼所に至りて京都の宗吾老僧の言葉に依りて尋ね來るの由を案内すれば、亭主は跳足のまゝ出迎へて、兩隱士の衣の袖を取つて一間に請じ、老僧よりの御使とあれば、定めし御眷屬の者にておはすらんと、大にこれを歎待せり。

兩士は吾々は左樣の者にてはなしと、京都にての次第及び勢多にての次第を委しく物語れば、亭主大いに之れに感じて曰く、四年以

前に上京ある由にて、彼の安否も知れざるに、斯く確かの頼りを聞きつる事の嬉しさよと喜びたり。依つて二三日此處に足を止めて居る内に、亭主の云ふのには、我が一子の十二三歳の時、何地へ行きけるか、その行衛を知らず、親族擧つて尋ねるに少しも其の甲斐がなかつたのである。

然るに百五十日を終てふと歸り來れり。人々驚いて問ふに、宗吾老僧に誘引せられて、普く諸國の神社佛閣名所舊跡を見廻りて歸りたりと云ふ。あれなるが其の老僧なり出迎へ給へと云ふ。見れば一人の老僧竹笠を持つて彳みたり。請じ入れ老僧に向つて云ふ。

如何なれば、我が子を迷はし給ひしか。答へ曰く。吾れは人間にあらず。當境地の稲荷の社に住む狐也。當年本山京都の仕者司の番



に當り舊地を離れる名殘り、且つは數百年來住所の恩んに報へん爲め、今一子を伴ひ、國々を見せ、その餘力に文を學ばせ、筆跡を敎ふ。

近々上京すれば、それが一生の別れなり。其の方の一族誰れかれ男女五十餘人、來る何日の夜饗應すべし、暮近くに皆々此處に集まる可し、その時地内の社の前にあかしを立てん、其の期を待ちて件の光りについて來る可し、と約して去りぬ。

皆々は不審乍ら其の期を待つ、件の光り見えければ、敎に從つて十町餘り行きたりと思ふに、寺に等しき庵室あり。其處に彼の老僧出迎ひて、約に違はず好くぞ來られしと、斜ならず喜びて、各座敷に請じける。

臺所にては、數十人料理献立をなし、程なく膳を持出でたり、老僧云ふ。吾れ魚物を忌めば、饗應心に任せず、麁末なれども緩やかにきこしめれよかしとなり。時に主問ふて曰く、老僧凡人ならねば神通を以て食膳を畜へ給ふこと自由ならん、他を掠め取りて此の美食を賜ふは不快のことにこそあれ。答へて曰く、全く人の物を掠め取るにあらず、吾れに金銀の畜へ多くありとなり。されば其金銀も又妙術の爲めなるべし。あらむづかし、其の根を解かずんば、末は晴れまじ、吾が眷屬一千餘り、彼等が毎月市中に出でゝ賣藥なしその餘慶利分みな拙僧に止まる、今宵の家具其の他のもの皆右の價を以て整へたり。然れども吾れに有つて益なし、追つて送る可しとなり。深更に及んでまた以前の如く、火の光を先に立てて、社の前



に歸りたり。

二三日過ぎて右の器財夜のうちに、社の前に積み置きたりける。

となり、路通の直談其の儘を記したるなり。

## ○奇怪な士

藝州小縣郡羽生村の庄屋六左工門の家に一人の武士來つて、六左工門に面會を求む、出で六左工門面接すると、其の形は人に相違なきも少し生臭き香あり。其の武士の言ふには、「己れは森源左工門と申すものにて、此の川に年久しく棲み候河童にて御座候、近頃の洪水に淵の中に巖に光り物の流れ來て、岩の間にはさまりあるを見て

眷屬共大に恐れ候へば、何卒人をして此の物を取り除け給へかしと、頼むので六左工門大に驚き、さては汝は河童なるや、左らば汝を初め一類のものを召し取りて一郷の害を除く可し、と怒りて申しければ、此の武士の曰く「我等の境涯も人間に等しく、不義の振舞を禁ずるが故に、人を害する事決してなし、何卒右の害除き給はれかしと、ひたすら頼む故に、さらば望み通りに爲してやらんと申して、其の日の中に水練達者の者を淵に入れて見せたるに、犁の鋒の岩の間に狹まれたるを取りに來る、其の翌日源左工門來たりて大いに喜び、一族の大慶是れに過たるはなく候、何ぞ謝せんと思ひしに恩に報ひ參するものなし、これが得がたきものなれば奉るとて、玉六個置きて立ち去りぬ。六左工門河童の贈物は怪しとて取り捨ぬ。其後



再度來りてりて亦三つ持ち來れり、先の卵食し給へるにやと問ふ、六左工門は實は取り捨しと言ふ。源左工門の曰く、「さて〳〵惜しき事をしてけり、是れは金鷄と申す鳥の卵にて、甚だ得難く候、此の度は必ず食し給へ、甚美味の物なりと申す、六左工門、やがて是を食すれば胸腹の間涼しくなり、神氣壯快となりて、身體の急に健かになりなるを覺ゆ、此の事を公に申上ぐると、公もスクと言へる鳥をいろ〳〵尋ねさせ給へども知るものなしとか。……其の後は源左工門度々來れるが、いつも大小刀を帶し、眷屬は三百餘りあると云ふ而して身體の臭氣ある故に、常に緣先に置いて物語せしといふ。これは寛政の初めの事なり。

## ○狐の嫁入

寛保元年五月十四日の夕暮方、本所中の郷竹町の舟渡守の小屋へ諸候の徒押へと見ゑて、羽織の紋印藤の丸の中に大の字付けたるを着て、舟請負の亭主を呼び付け申しけるは、某ば大久保荒之助の家來なり、主人の息女、今夜下谷邊の何某殿へ婚禮の輿入なり。其の同勢は大勢なり、渡舟を此方の岸に殘らず漕き容せ置く可し、船賃は定め外増錢をも出す可し、又祝儀も出す可しとて金一兩を取らせけり。

渡守大いに嬉こび委細畏りたりとて、舟拾艘計り本所岸に寄せ置



き、右の輿を待つ程、に夜の九つの頃提灯萬燈の如く燈し連ねて、さも凛々しき警固の武士大勢前後を圍み、姫君の輿と覺しきを眞中に舁き、色々の行列目を驚かしぬ。

船頭共出迎へて尊敬して舟に打ち載せ、大事に竿を取つて船を押して向の岸に渡しける。

扨て供の大勢は、舟より上る其のまゝ萬燈の如き提灯消えて人音も失くなり今迄の氣色更になし。

其の翌日船頭の親方は昨夕の金子をば、船頭に割與へんと入紙を取り出して見れば、小判と思ひしは木の葉なり、扨ては夕の嫁入は人間にあらず狐の仕業なるかと何れも呆れ果てたり。

これは葛西金町半田稲荷なり、淺草安左工門稲荷へ嫁入りせる所

謂狐の嫁入なりしこと、後にて判りたり。

## ○山伏の祟り

仙臺柳町といふ所に住むつかまき師夫婦の者あり。有徳の譽高く娘二人ありしが、姉娘十三歳計りの時、庭に遊びて紙鳶の上がるを見てありし折りに、石に躓づき膝を強く打ちてはれ痛み、終には足苗になりて、二三年患ひて死したり。

然るに妹娘も亦同じ十三の時、庭に降りて是れも同じく同じ石に躓きて膝を打ちければ、兩親も氣にかゝりて、色々と藥用手當を加へしかど、更に其の効見えず、これも亦足苗になりて十六歳まで長



らへしかば、尚怠らず力を盡し加持祈禱に厭禁にいたる迄、萬よしと言はるゝ限りのことは手に手を盡せしも更に其の驗なくて、終ひに命を終りければ、屏風を引き廻し、水など手向けて置きたるにうなる聲の聞えしかば、スハ息吹き返したりと悦びて母の行きて見れば、娘の言ふやう、さて至極快く寢入りて有りしが、今、何方へやら行く所を夢に見たり。

またねぶたくなりし故眠らんと思ふが、よく寢入りたる頃を見て夜具を剝ぎて見給へといひて寢ぶりしかば、兩親は娘の言ふに任せて少し程をへて夜具を捲りて見たれば、こはいかに其の面娘にあらで鬼の如し。色赤く黑く、眼中きら〳〵と光りて、いたく怒れる面さしの恐しさいふばかりなし。母は思はず飛び退きて、夫にその由

を告げて、兩人して行き見しに前に變らず。夫婦呆れてゐたる時かの變化起き直りて、眼を怒らし聲たてゝいふやふ、汝等二人に云ひ聞かすべき事ありて現はれたり、其處去らずして、吾が言ふ事を聞け、我は此の家の七代の祖に、金を取られて殺害せられし山伏の靈なり。我れ昔官金をもちて上方へ行きし時、先祖の男と道伴れになりたりしが、茶屋に入りて倶に飲食して後、價を拂らはんと懷中より金をとり出せしを見て、我が懷中の豊かなるを知り、山中にいたりし時、不意打ちに切り殺し、官金を奪ひとりて、出世を致せしぞ其の時の殘念骨髄に透るといへども、代々運勢盛んにして崇りをなしがたく、漸く七代にいたりて衰運に傾きし故恨を晴らすなり。斯くいふ事の僞りと思はゝ、確實なる證據あり、簞笥の抽出に入れて



ある大小の太刀は我が指料なり。尺は何尺何寸銘は何々といふ事を詳に語りきかせ、急ぎ出し見よ、是は僞はらざる證據ぞと、夫婦は夢の心地して、恐しさに手もぶる〳〵と大小をとり出して見しに、變化のいふに露違はざりしとぞ。

此の大小は、先祖より傳來の物とて、代々仕舞ひ置きし事にて、寸尺銘も夫婦は知でありしを、まして娘子供の知る可き筈なし、實に、昔、さる事のありしならんとあやまり入りしに、變化のいふ、この娘の命助けたく思はゝ、我の望める官位の人の供廻にて、此の家より葬禮を出す可し、さあらば命を助く可しさなきに於ては、これ限りとぞいはれて、兩親は如何やうの事にても仰せに背くまじ、娘が命助け給へと願へしかば、急ぎ葬禮の仕度せよと、夜具引き

かづきしが、又元の娘の面にぞなりたり。

變化は斯く言へども、大病人の有る家より葬禮を出さんも面白からすと思ひて、寺へ其の由を話なして、法名を貰ひ人を雇ひて寺にて葬禮を致さんとしたりしに、其の人々の寺の門に入りたる頃、變化あらはれて、母を呼びて此の家より出たさば、娘の命助けんと思ひしが、あまりの仕方なり、是にては命乞ひは叶ふまじと、大に怒りて云ひたり。父は葬禮を整へて、是にて娘の命助かる事と悦びて安心しながら歸りしに、有し事どもを聞きておぢ恐れ、また更に家より葬式を調へて、出したしかば、山伏の靈も靜まりやしたりけん、現はれずなりし。一度息引取りたる娘の甦りしこと故、怨靈は立ち去りたるも、娘は痛く弱りて終に又絶命せしとぞ、此の程の心盡は



むぞことゝなつて、月のうちに三度葬式をしたりとぞ。

他に聟養子などもありしが、此の變化に恐れて、家をいでゝ居らず、夫婦も氣ぬけして、家を賣りて數代の富家も、長病中の物入に使ひ果し、破衣一重にて身に添ふ物もなく、行方知らずなりしとなん。

山伏は七代まで祟と聞きつれど、かくたしかに、見聞きしこそは誠に稀なる事なり。

## ○橋本正左衛門狐使ひの傳授を受く

清安寺といふ寺の和尚は、狐使ひにて有りとぞ。橋本正左工門ふ

と出會ひてより、懇意に成りて、折々夜話に行きぬ。

或夜の事、五六人寄り合ひて話し居たりしに、和尚の曰く、御慰みに芝居を御目に掛く可しと云ふ。

忽ち座數芝居の體に變じて、道具立の仕掛に成つて、鳴り物はやし、色々の高名の役者共出で働くこと正身の歌舞伎に、聊か疑ふ處なし、客は思ひも寄らぬ事にて、面白き事限りなし。寄り合ひし人大いに感じたり。

正左工門は例の不思議好きの心から、一しほ悅びて、夫れより又習ひ度しと思ふ心の起つて、其の後度々寺を訪ひたりしも、和尚も其の内心を知りて、其方は飯綱の法を習ひ度しと思ひ給ふには、去らば先づ試みに三度ためし申す可し、明晩より三夜續けて來られよ



之を堪えつゝけられなば、傳授せんと發言せしを、正左工門飛び立つ計り悅びて、一禮述べ如何なる事にも堪へ忍ぶべければ、その飯綱の法を授け給へと、勇み々へて翌日の暮るゝを待ちて行きぬ。

先づ一間に籠めて一人置き、和尚出逢ひてこの三度の責ある内、堪えばたく思へば、何時にても聲を揚げよ、免るし請ひなば免るすべしと云ひて入りたり。

程もなく、ちら〳〵と鼠の幾つともなく出で來て、膝に上り袖に入り、襟元を渡りなどするは、いとうるさし迷惑なれども、誠のものにあらざるべしと、心をすえて堪えし程に、やゝしばらく經て、何處ともなく皆なくなりぬ。

和尚出でて來て、いや御氣丈なることなりと挨拶して、明晩又來

られよとて歸へしやりぬ。

翌晩も行きしに、前への如く、一人居れば此の度は、大小の蛇幾つとなし這ひ出で、袖に入り襟に纏ひ、わるくさきこと堪え難きも是れ僞物と思ふ計りに、堪え通して有りしとぞ。

いざ明晩をだに過しなば、傳授を得んと心に悅びて、翌日の晩行きしに、一人有りて待て共〳〵も出ず、やゝ退屈に思ふ折り節、こは如何に早く別れし老母の、末期に著たりし衣類のまゝ眼凹み、小鼻は落ち、只だ口唇が乾き縮み、齒の弱りたる顏色容貌、髮の亂れたまで、落命の時分身に浸て今も忘れざる老母の形相に、少しも違はざる態して、ふは〳〵と歩み出でたり。

此方は鼠蛇に百倍して、心中の憂ひ悲しみ堪え難く、既に詞をかけんとするに、心惡しく堪え兼ねて、眞平御免と聲をかけたるに、母と見えしは和尙にて、笑顏して座して有りけり。

正左衛門面目なく、夫れより後は二度と行かずとなり。



## ○白狐の住職

昔甲斐の國夢山の麓に彌作とて、一人の獵人あり。常に鼠を取り熊の脂にて烹て、罠にかけては狐をつり、其の皮を剝きては市に賣る事を渡世にせり。然るに夢山に年經たる狐あり子多く生みけれども、大方は彌作が爲めに取られて僅か一疋殘り居たり。親狐是れを恨みにや思ひけん、寶塔寺に白藏主とて、彌作がをぢの法師となれ

るがあり。狐是の叔父を善く知りけん。ある時をぢの白藏主に化けて、彌作が許に至り、殺生の罪は後世の障りなれば、狐取る事を止めよとて、錢一貫文を與へて罠を持ち歸へれり。されども彌作は生業の出來ぬを嘆き、またもや錢を得んと思ひ寶塔寺に赴かんとするを狐知りて、白藏主を誑り殺して、自ら白藏主と化けて、其の寺に住職となること五十餘年、同國逸見の野に猪狩のありける時、人に交り見物に出でしに、佐藤藤九郎と云ふ鄕士が、家に飼ひ置きたる鬼武鬼次とて二疋の犬の有りけるが、是れが爲め喰ひ殺されて、遂に生體を現はしたり。白き老狐の尾には白銀の針の如き毛生じ居たり。人々其の祟を恐れて、鄕の山蔭に埋めて塚とし詞を建て狐の杜と云ふ。能狂言のこんしらい、是れに基づきて、人たる者の惡しき



みちに入るは畜生の心と同樣なりと云ふ事を、堅く戒めんがために作意を添へたる敎訓なり。之れより法師の狐に似たる行ひするものを白藏主とは言習はしたるなり。大和のあしな寺のことにしたるは俱に附會の說なり……百物語

## ○柳將軍の居宅

宣室志曰、東洛に故宅あり、空しく鎖すこと年久し、唐の眞元年中に盧虔擢でられて御史となるに依つて、其の故宅を買つて住せんと欲す、此の宅は怪物ありて棲むこと能はず、故に久しく空閑荒廢の宅となれりと、盧虔が曰く、吾れ善く之れを弭めんとて、一夕盧

虔從吏二人と其の堂に寢たり。僕に命じて堅く鎖して人の出入を止む。從吏は武勇にして能く射る。乃ち弓矢を執りて軒近く坐す、夜半に門を叩く者あり、從吏問へば柳將軍の使なり。書を盧將軍に奉ると云ひて一幅の書を軒下に投す。盧之を見るに曰く、

吾家二於此一會レ年矣、堂奥軒級皆吾居也、門神戸靈皆吾隷也、而君突二入吾堂一豈其理耶、宜二速去一勿レ招一耻

と讀畢れば、其の書瓢然として四邊に碎散りぬ。又聞く、柳將軍來れり、盧將軍御使に見んと、身の長數十丈にして庭上に立ちて、手に一瓢を握る、從吏卽ち引湛て放つ、手に執る所の瓢に當る、卽ち退き去りぬ。云々

又來りて軒に附きて首を屠伏して堂を伺ふ、其の貌甚だ異相なり、



是れを射るに其の胸に中る。卽ち退き去りぬ。盧虔其の跡を究むるに東の空地に當りて柳の樹の高さ百餘丈なるがあり、矢其の上を射貫く。是れ所謂柳將軍なり。云々……分類故事要語

## ○狐の化け損じ

筑前の國福岡の城下より一里餘り過ぎて岡崎村に馬乘の高橋彌兵左工門といふ者あり。

所用の爲めに、入相の頃より城下に出で行きしが、夜に入ると齊しく歸りしかば、いかで早く歸り給ふと妻の問ひしに、去れば途中にて、先方より使來り用は足れりとて、止めければやめにりとて、

其の儘閨に入りたり。

此の家に一人の老婆ありけるが、妻の袖を引きて、主人常には右の目盲いたもふに、只今は左の目盲いたるこそ不審なれと告ければ、妻驚きて、さらは起して見んとて、姥が俄かに腹痛なれば、藥を與へられよと云ひしかば、斯く疲れて寢たるにと呟きながら、起出しを見れば、左の目盲いなり。

偖ては疑も無き妖物なりと、妻は最早婆も快く待りきまゝいねさせよとて、寢戸の戸をしめ、四方の圍みを嚴重にして、臥したる上より咽を刺し通せば、姥も後より疊みかけて打ちければ、コン〳〵と鳴きながら死んでけり。



## ○人間の顔

新潟の大精舍の眞淨寺の僧某、或秋の夜のいたく更し時、檀家より寺に歸るとて獨り堀際の小家通りを通行する折、何とは知らず急に心淋しくなり、總身の毛寄立ちて、急に變な心地になつて來たので、四邊りを顧ると、藁葺厠屋の屋根に、南瓜の繁り合ふ葉の間に、青ざめたる人間の顔一つありき、かの僧に向つてニッコリと笑らふ。僧驚いてアット聲を出して、持つたる杖にてかの頭を幾度となく打つに、その聲に近所の人々も目を醒まし「誰れぞと問ふので僧も生たる心地して、「化物あり、起て呉れと〳〵呼びたれば、近隣の人も

寺僧と知り、起き出で火を點じてこれを見ると、南瓜に杖の打ちたる跡ある故に、人々之れは人の頸にはあらで南瓜のあたまなりと、皆々笑ひけるが、僧も自分の臆病を耻ぢて尙ほその南瓜を續け樣に打てば、ぐう〳〵と聲すれば、人々怪しみて葉の蔭を探し求むるに忽ち大きさ狗の子程の墓一つ、葉に隱くれてすくみ居たり、偖ては曲者と言つてつひに打ち殺せりと云ふ。

## ○白狐閨の伽をなす

常陸の國栗山といへる處に、栗山覺左工門と云へる者あり。四代前の覺左工門、萬般の藝にも秀いてたる者なりしが、四十の



年妻におくれて、一生獨身にて暮らしける、次の年春の頃、或る夕暮れに一人の女來りて、遠き國より參りし者、親族の家を尋ねても知れず、最早日暮に及ばんとして難儀せり、何卒今宵一夜宿らせ給はんやといふ。

覺左工門聞きて、女一人といひ、日暮れては難儀なる可し、苦しからず今宵は我家に泊られよ云ふ、女は大に悅びて、やがて室に通りける、覺左工門は、下男に云ひ付けて夕餉を按排して女にすゝめ、近くよりて看る、に其の容貌美しく、種々の談話するを聞くに殊に怜悧なり。

其の女の言ふには、妾は下總國の者なるが、幼き時に父母に別れ親族もなきまゝに、此の國に伯母のあるを尋ねて參りたれど、是れ

も亦行衛知れず。一向に便りなき身に候と、潸潸と泣きけるにぞ、覺左工門も哀れを催して、左る事なれば、尙少時我が家に居て、縫針の業など勤め、悠々と尋ねられよと云ひければ、女嬉びて、次の日より這家に居て務めけり。

殊の外賢しく、何事もよく心付きて働きけるにぞ、覺左工門も天晴れなる者に思ひて、後には閨の伽となし。

其の後間もなく懷胎して、次の年に一個の男兒を產みけるにぞ、覺左工門も愈々愛しみて暮し居たり。

此の兒五歲になりける時、母親と晝寢して在りけるを、此の兒、母樣に尻尾が出ましたと云ひながら搖り起しければ、母親は大いに驚きて、立ち所に白狐に成りて、奥の間に走り入りて、竟に其の行



方を知らずなりけり。

覺左工門此の樣子を見て驚き、家の裡殘る隈なく尋ねけれども知らず。

先妻の白無垢を彼に與へ置きけるに、其の白無垢に、血にて和歌を書き付け置きたりとなん。

## ○狐書信を送届く

是は正しき物語と聞く、羽州秋田侯の內にて、何とか狐と云ふがありて、此の狐よく人に馴れて、且能く走る依て秋田侯の內にて書信ある毎に、其の狐に托して送り屆けたのである。

書翰を首に結びやれば、忽ち江戸へ通ず。

然るに或時信書達せず、人甚だ疑い訝りて、其の行途を搜り求むれば、途中大雪に傷きしと見えて、雪中に埋れてありしとぞ、晋の陸機が犬の故事にも類せることなり。

## ○生靈の祟

古昔、或男、京より、美濃に赴かんとて、夜深に京を立ち出てたりしに、一人の女大路に立ちて男の來るを見て、此の邊に民部大輔の家を知らざるか、若し知りたれば已を伴ひ呉れよと切にこれを頼みたり。幸ひ男は民部の家も知り且つ知人もある事故に案内せんと



云へば、女はいたく喜び、已は近江の何村の何某といふものなれば道の序にてもあれば、立寄りくれといふ。男は女を連れて民部大輔の家の門に到れば、女の姿は搖き消すやうに失せけると等しく、家内に泣き呼び聲と、物凄き物音なとも聞えたれば、男は怪しみ訝りつゝ、門邊に立ちためらひ居る程に、夜明けたれば、其の家に知る人もあれば、立ち寄りて、事の樣子を聞くに、妻の近江に在りけるが、生靈となりて日頃主人を惱ましてありけるが、此の曉又たその生靈の來て取殺せるなりといふ。

依て其の男は近江の方に往きて女の家を尋ねしに、女は家に在りて、先夜の禮などを言ひ喜びて厚く饗應せり。

又是れもむかし、江戸の靈岸島に瀬戸物屋喜兵衛といふ出店に六

兵衛といふ者あり。大阪より甥の何某を呼び商買させしに、此の甥天性利發にして、商買の取引何くれとなく立働き、店は益々繁昌するを以て、喜兵衛の女房是れを見て我が子の愚かなるに氣付き、若しや六兵衛に此の家を取らるゝ事もあらんかとて、自然六兵衛の甥を憎みてあしが、いつしか何某は病み臥したり病も重くなりて、譫言に喜兵衛の妻の祟りを語りし故に、喜兵衛も双方の間に立ち入りて和解したるより病も平癒したりと云ふ。

## ○愛らしくもあり恐ろしくもあり

肥前の國平戸の藩中にて、田中某といふがありしが、平戸の在一



二里距りたる村より雇入れたりし下女あり。

此の女美貌にして天性柔順にて主人の氣に入りしが、何日しか田中は此の女に手をつけたのを、妻の聞き知りて家内に風波の起り爲めに里方に歸したるも、田中は時々、此女の許に尋ね行きしなり。

或る夜往かんとせしに、障る事あり、且雨も降れば時後れて出でたりしに、途中にてふと見れば酸漿の實の如き青き光物ありて、田中の傍に來りしかば、狐狸の所爲ならんと思ひて、刀に手をかけ拔かんとすれば、遠く飛びのき切る可くもあらず。刀の手を止めればまた來りて始終傍を離なれず。田中も詮方なく火と倶にゆくにいつしか女の家に至りたり。

田中は常の如く入らんとすれば、火は先だつて家に入りたり。田

中は怪しく怖しくも覺えたるが、女の起出で「君を待ち詫びて餘り久しかりしかば、眠りたれば夢に君を迎へんとて、堤のある邊に至るに出合しかば、諸共に歸り來たりと見たりきと語りしにぞ、田中はさてはと思ひて、其の深情に悅ぶも空怖ろしくなりて、間遠くなりたりとの事なり。

―――を　はり―――


大正十一年四月十五日印刷
大正十一年四月二十七日發行

編纂兼發行者　東京市小石川區高田老松町六十番地　酒井忠平
印刷者　東京市牛込區新小川町一丁目九番地　成田滿
印刷所　東京市牛込區新小川町一丁目九番地　雄文堂印刷所

（奇蹟ものがたり）
定價金貳圓五拾錢



不許複製



發行所　東京市小石川區高田老松町六十番地　雄文堂
振替口座　東京一九一四一番

## 豫告

文學博士 物集高見先生述

怪奇ものかたり

——大正十一年秋刊行——

文學博士 鷗外 森 林太郎先生著

好評忽ち三版

# 天保ものかたり

四六判 全壹冊
體裁 頗瀟洒
定價 金貳圓參拾錢
內地送料 拾八錢

■護持院ケ原の敵討■
■大鹽平八郎■

新歷史小說

收むる所二篇。共に天保時代に於ける有名なる出來事也。鷗外先生新に正確なる史實に基きて此の雄篇を公にせらる。昇平三百年士民皆な惰眠を貪るの時、腥風一陣、天下の耳目を聳動せしめたるの光景、先生の靈筆によつて躍如たり。蓋し近時文壇の一大傑作。

發行所 東京市小石川區高田老松町六十番地 雄文堂

振替口座 東京一九一四一番

◉嚴谷小波先生・村山龜齡先生序文
桑田春風先生編

最新刊

# 俳趣味の手紙

體裁 四六判紙數三百餘頁 表紙手摺木版十度摺

脊絹天金箱入 體裁典雅優麗

定價金貳圓八拾錢
內地送料金拾八錢

本書は、遠くは芭蕉其角蕪村、近くは子規・紅葉・竹冷・松宇・鳴雪・虚子・碧梧桐等俳壇の鉅匠は勿論、傍ら俳諧に遊ぶ諸名士の俳趣味の横溢した手紙を網羅したるもの、而して其手紙には必ず筆者得意の俳句が挿入してあるので、一面筆者其人の自賛句集を兼ねた者とも云へる。かういふ手紙のみを集めた本書は、平生沒趣味な、形式的な、窮屈な手紙のみしか書かない人達に取つて、眞に一服の清涼劑となるであらう。敢て一般手紙研究者の座右に薦む。

發行所 東京京小石川區高田老松町六十番地 雄文堂 振替口座 東京一九一四一番

水野葉舟先生新著

好評重版

# 愛の書簡

體裁 四六版三百數十頁 表紙手摺木版

脊絹天金箱入 體裁典雅優麗

定價金貳圓五拾錢
內地送料金拾八錢

■父より子へ ■兄より妹へ ■娘より母へ ■親しき友へ……愛情の流露―た手紙はどう書くか

名は『愛の書簡』なれども戀愛書簡に非ず、親子、兄弟、夫婦、朋友間の愛情を中心とし、如何にして眞情の流露せる書簡を認むべきかを說けるもの、書簡に對する著者の見解を叙し、趣味を鼓吹し、幾多の作例を示すと共に鷗外・藤村、蘆花氏等十數大家の私信、作物中より模範文を蒐集せるもの也。

發行所 東京市小石川區高田老松町六十番地 雄文堂 振替口座 東京一九一四一番

泉鏡花先生新著

# 相合傘

表紙木版手摺
四六判天金箱入紙數三百餘頁
定價金貳圓貳拾錢
内地送料拾貳錢
コロタイプ色刷入
中扉

## 最新刊

文壇の巨匠、泉鏡花先生近來の佳作、雄篇の一大傑作集にして新粧更に成りて世上に現はる、收むる所は五大力以下の三大篇、悉く皆是れ艶麗したゝる許りの好文字、花なき後の花を探ねんと欲するの士は、再び斯の書に其の行方を見出すを得るに庶幾からん乎、清新の氣新らる緑陰の下絶好の讀物として敢て江湖に薦むる所以!!

發行所 東京市小石川區高田老松町六十番地 銀鈴社

電話番町四四三六番
振替東京四八四六九番

◀村山龜齡先生著▶

文學博士坪内、建部、故吉田參先生序文、及び早大教授五十嵐先生書翰

好評九版

## 平家詩史

菊版天金箱入
表紙、見返、箱貼、木版手摺
寫眞版十八面
定價金參圓八十錢
内地送料金貳十四錢

一大史傳にして一大詩篇、構想の雄大、行文の流麗、讀者おそらくは卷を措く能はざらん。源平時代の眞世相。眞面目を此書に求むべく、文章修辭の按排●呼吸●活模範を此書に求むべし。天下同調の士の清鑑を俟つ。

好評五版

## 紀行文集 山水帖

四六版全一冊函入
表紙、見返、箱貼共木版手摺
寫眞版壬十餘箇
定價金貳圓五十錢
内地送料金十貳錢

山水帖紀行文集にして、著者の文名、一時に喧し、收むる所の十有一大篇、口語體あり、雅文體あり、美文體あり、悉く皆之れ、紀行文の精髓にして、文を學ぶものの好軌範たり。

最新好評

## 書翰集 家より旅より

三六判天金箱入
表紙、見返、箱貼、木版手摺
定價金貳圓參十錢
口繪玻璃版二面
内地送料金十貳錢

世間周知の『平家詩史』著者の書翰集也。製本又艶麗端美、娉婷たる佳人の夏の粧の如し。

發行所 東京市小石川區高田老松町六番地 銀鈴社
振替東京四八四六九番

◉岸蘆風先生編書

最新版

習字兼用
青年の手紙

十二ケ月

□忽ち上達する習字手本生る！

●青年立志出世の要道は、先第一に、日用消息文の熟達と習字筆墨の練磨とにあり、此の書、斯道の大家岸蘆風先生の筆蹟其儘を、多額の費用を顧みずして、全部コロタイプ版に現はし、肉筆と毫も異ること無らしめし者にして、而も其の價至つて、低廉一方青年日常手紙の文の好軌範たると同時に、他方書簡用草體の活手本たり、最初先づ執筆の『姿勢』及び筆の『持方』を教へ、次で『書道』練習十則を掲ぐ、皆共に簡にして而も其の要を委くするが故に、座居して天下の良師に就くの思ひあらしむ。

全部コロタイプ版
印刷及體裁最麗美
定價金五拾錢
內地送料拾貳錢

發行所　東京市小石川區高田老松町六十番地　雄文堂

振替口座　東京　一九一四一番

506
131

終